師範學校

國文教科書

本科用

修正十六版

卷一

375.9
Y19
教科書

42569
教科書文庫
4
810
51-1916
20003
02268

375.9
Y019

資料室

文部省檢定濟
大正五年一月十二日　師範學校國語科教科書

師範學校國文教科書

吉田彌平編

本科用

卷一

東京　光風館藏版

廣島大學圖書之印

廣島大學 教 26515 圖書

緒言

一本書は師範學校第一部本科の國語科講讀用教科書に充てんがために編纂せるものにして、文部省所定の教授要目に基づきて第四回の修正を加へたるものなり。

一本書六卷を通じてその中心たるものは現代文にして、口語文・候文・古文及び韻文を適宜之に配合せり。

一本書は國文學史の大要を知らしめんがために、卷五・六に於て各時代の文學を槩說せり。蓋し現行の規程は別に文學史の目を存せざるにより、讀本中に於てその一斑を示し、時代思想の變遷

を知らしむるを必要と認めたればなり。

一本書は普通の讀本と同じく有用の知識を與へ、高雅の感情を養ふべき材料を收めたるが上に、更に本書特殊の目的に適合せしめんがために、(一)教育的興味を鼓舞し、教育者たる信念を堅固ならしむべきもの、(二)國語を愛好し、文學を鑑賞し、國語の諸問題につきて公正なる見解を有せしむべきもの、及び(三)向上の精神を養ひ、修養の興味を感じ、勇猛不退轉の道德的勇氣を起さしむべきものを採錄したり。特に國定小學讀本に出でたる材料の原據にして誦讀に適するものは務めて之を採用したり。

一地圖・繪畫の類にして本文の理會に必要なるものは務めて之を

插入せり。その肖像・筆蹟を掲げたるは聊か以て古賢を仰慕し先哲に私淑する所あらしめんの微意のみ。

一鼇頭の紀元年數はその人物・事件の歐米に屬するものに就いては西洋紀元を用ひ、その他はすべて我が國の紀元に從ひたり。

一候文・短歌等は特に彫版を用ひて、行草體に筆寫したるものを示したり。またこれ實用を主とするがためなり。

一本書の送假名・句讀點及び分別書方等は文部省著作の國定小學校教科書の例に準據せり。

一每章題目の下に作家の氏名又は氏號を記し、文末に出所を注す。その或は名を用ひ、或は號を用ひたるはまたたゞ通俗の稱呼に

從へるのみ。抑諸家の文自ら諸家の法度・風格あり。然れども之を教科書中に採錄するに當りては、勢、多少の改修を加へてその體例を一にせざるを得ず。而して改修の甚だしきものに至りては、單にその出所を注するに止む。僭妄の罪、避くべからざるを知ると雖も、また固に已むを得ざるに出づ。是、編者の深く諸家に謝する所なり。

大正四年十月

師範學校 **國文教科書** 本科用 卷一

目次

一 教育者たらんとする青年に與ふ(候文)……大和田建樹 頁一
二 千里の春……大和田建樹 五
三 春の箱根(新體詩)……幸田露伴 一三
四 冰川清話(口語文)……勝海舟 一五
五 南洲遺訓……西郷南洲 二五
六 日蓮上人……高山樗牛 二六
七 音訓……三四

八 道話一則（口語文）……柴田鳩翁 四三
九 にはとこの花（短歌）……四八
一〇 杜鵑を聞く……瀧澤馬琴 五〇
一一 札幌農園……菊池幽芳 五一
一二 上毛の三山……松本亦太郎 五七
一三 「世界之無線電信」を讀みて（候文）……島村速雄 六四
一四 日本海の海戰その一……新保磐次 七三
一五 日本海の海戰その二……新保磐次 八四
一六 せめては草（新體詩）……森鷗外 九一
一七 梅雨……德富蘆花 九四

一八 鳥居勝商……湯淺常山 九五
一九 細川幽齋（口語文）……一〇一
二〇 門生に諭す……室鳩巣 一〇三
二一 我が幼時……新井白石 一〇八
二二 故郷……正岡子規 一一四
二三 朝顏を贈る（候文）……一二〇
二四 鷹山公と平洲（口語文）……嘉納治五郎 一二三
二五 田園の夏……杉村縱橫 一二八
二六 良夜……德富蘆花 一三五
二七 友に答ふ（候文）……正岡子規 一三九

二八 模範村（口語文）……一四二
二九 天理と人道……福住正兄 一五〇
三〇 山内一豐の妻……新井白石 一五四
三一 四季の月（今様）……石川依平 一五八
三二 不識庵……尾崎行雄 一六〇
三三 朝鮮の民情……萩野由之 一六三
三四 禁庭の野分（昭憲皇太后御作）……一七七
三五 明治天皇の崩御……一八〇

師範學校 國文教科書 本科用 卷一目次終

帝國圖書館藏

師範學校 國文教科書 本科用 卷一

一 教育者たらんとする青年に與ふ

拜啓。方今、天下の人心漸く實利に傾き、海内の青年爭うて功名に奔る時に際し、足下の如き少壯有爲の士が、來つて此の名利に緣遠き教育界に投ぜられんとするは、百萬の援兵を得たるにもまして老生の意を強うする所に御座候。足下なほ春秋に富む。勉めて怠らずんば今後の

造詣測られざるものあらん。老生は之を思うて喜悅の情に堪へず候。

教育の事業が社會に貢獻する所の偉大なるは老生の呶々を待たぬ事に候。荒蕪を拓き、道路を修め、公園を造り、病院を設くるが如き、何れも社會の福利を增進する事業に候へども、別して教育の事業に至つては、一層直接にして且一層痛快なるものに候。何となれば、彼はたゞ人間社會の情態を改善するに過ぎざれども、此は直ちに人間そのものを改善するものに候へばな

獻＝献

間＝間

り。人間にして改善せられんか、人間社會の情態は自ら改善せらるべき筈に候。

世にはまた教育事業の困難を訴へ、遂には教育者の任務を退避せんとする者さへこれあり候。かゝる人に向つては、老生は「凡そ世の中に何の事業かよく困難なくして成し得るものぞ。」と反問致したく存候。勿論、教育の如き高尚なる事業に、少からぬ困難の存するは免れ難き事に候。さりながら、日々の事業に伴ふ快樂は優にその勞苦を償うて餘りある事と存候。試に思へ、教

育者の活動する世界は天眞爛漫、清淨無垢なる小國民の世界に候はずや。花を養ふ者は花に對して身の煩を忘る。我等は我が兒童を一見したるのみにて、既に一切の苦惱を忘るゝ事に候。實にや活潑なるは兒童なり、愉快なるは兒童なり。兒童の世界こそはこの世からなる樂園にて候へ。

老生は足下の著眼が時流に拔きいでたる所あるを感じ、前途の成功を祝し候。なほ追々卑見を申進ずべく候。不具。（教育者の教師に據る）

惱…腦

二　千里の春

大和田建樹

山靑く浦霞む。千里みな春なり。此の閒に一線を曳くものは何ぞ。一列の汽車、今や東京より東海道を下りゆくなり。海に面して窗に倚る客、鉛筆と紙とを手にして寫し出せるは、歌か、詩か、抑〻畫か。七砲臺邊、波穩かにして、羣れ飛ぶ鷗、落花の風に飄るに似たり。帆を半ば張りて出でゆく船あり、櫓をあやつりて橫ぎる舟あり。房・總二州の山は霞に消えて、視れども見えず。

窗＝窓
羣＝群

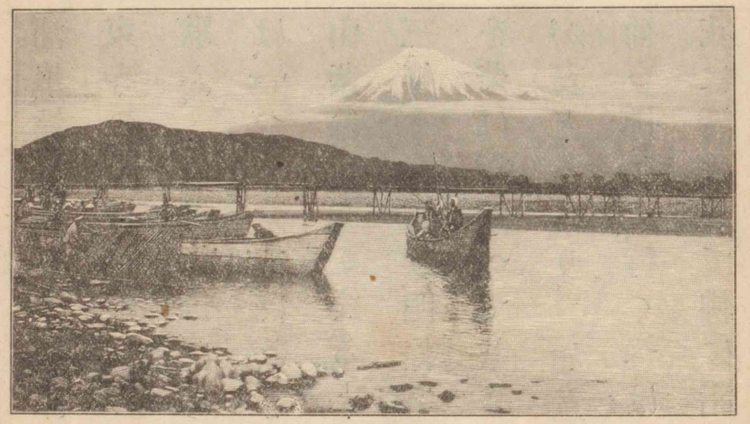
畫＝畫＝画

松青きところ、桃の花紅なり。藤澤の野、山北の谷、人ごとに唯美しと呼ぶ。

三保の松原煙りわたりて、春は畫の如し。磯に碎けて折れかへる波、波路の末に浮きたつ雲、何物か造化の妙筆に漏れん。近き舟は行けども、遠き帆影は動かんともせず。杳としてほの見ゆるは伊豆なるべし。富士は水彩畫の如く、窗の右に立ち、又左にあらはる。

三尾の平原、麥は綠に、菜の花は黃なり。熱田の社を左に見れば、やがて名古屋の城はあらはれたり。田

*木曾義仲の墓は大津市にあり。



富士山

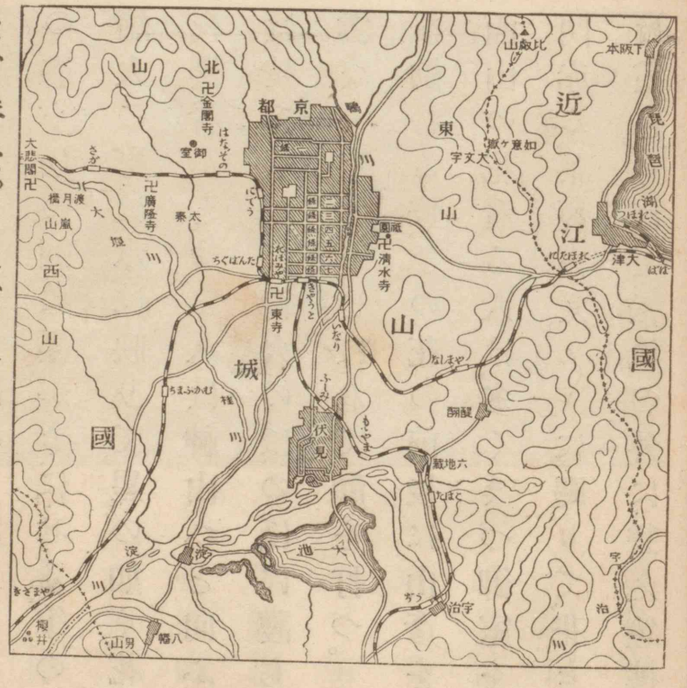
夫は金の鯱を指さして妻と語り、行商は旅宿の良否を評して我が好む方へと人を勸む。

彦根去り、草津來り、煙は早くも瀨田川に横たはりて、京都も近くなりぬ。朝日*將軍の遺迹は何れの處ぞ。霞にたゝまるゝ遠近の山影、或は淡く、或は濃く、鳥の

著＝若

浦風、波に眠りて、粟津の松原獨り昔を語り顔なり。東寺の塔は我を待ちて立ち、鴨川の水は我を迎へて歌ふ。最愛の母にあひ、懷かしき父と語るに似たるは、いつも京都に著きたるときの心地なり。

山紫に、水明かなるところ、たゞ夢のごとく、現の如く、三條をわたり、四條をわたること、日に幾度ぞ。躑躅を柴に折添へて戴きつれたる大原女も、いつしか我が友となれり。如意嶽より吹來る春風は輕く我が袖を拂ひて、行くへは遙かに隄の柳の絲にあり。花に誘はれて佛に詣で、佛に導かれて花を見る客、け

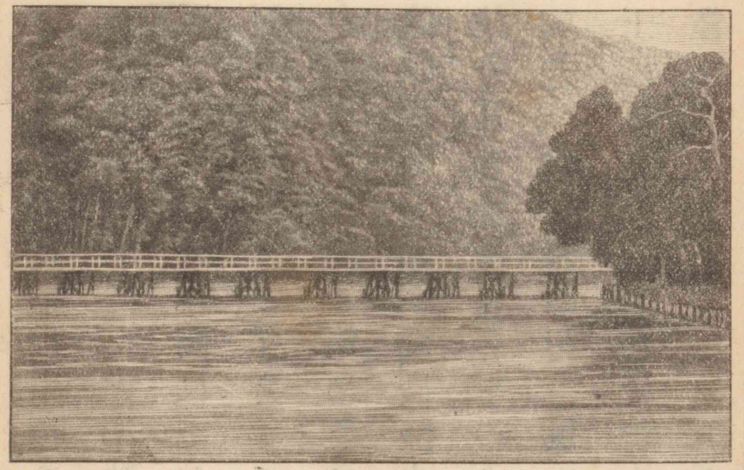


ふも清水觀音堂の前をみたしぬ。舞臺の上より見おろす人、舞臺の下より咲きほこる花、さながら一幅の四條畫なるに、媼は此の間に立ちて「蕨餅めせ。など呼ぶ。しばし息みて、眺めわたせば、淺黃に、藍に、

祇……祇

霞みわたれる八幡・山崎のあたりもゆかしきに、東寺の塔を松の間に墨がきにせる筆の力こそ面白けれ。燈火の影は水に映りて星の如く、花の如し。祇園の夜櫻看んとする人は神山へと向ふ。一もとの老木は枝を垂れて篝火のほのほに護られ、寒からぬ雪は雲なき空よりこぼれて顔を打つ。田樂を賣る聲、茶を勸むる聲、この花の前後に山彦を反し來る。西山の花看る人は、多くまづ御室を指す。松綠に、樓門赤く、茶煙たえぐ〳〵に颺りて、花きはめて白し。塔は霞をもれて松風の外に聳え、鐘樓は昔を說きて香

梢……稍



昌山

雲の中に包まる。誦經の聲遠く響きて、鶯の歌高き梢にあり。

かさなる岩根をふみしめて生ひたつ松、その間を點綴して咲きほこる花、嵐山の春こそいま酣なれ。小舟漕ぎゆく人あり、岸の此方に眺むる人あり。水清く岩を洗

素性法師
古今集
*見渡せば柳櫻をこきまぜて都ぞ春の錦なりける。

ひて玉と碎け、山白く煙を離れて空にかゞよふところ、此の美は彼の美と相映じて自然の彩色をなす。阪を登りて大悲閣に至れば、眼下にひろげらるゝ一幅の圖、柳*櫻をこきまぜて、さながら西陣を織出せるが如く、又友禪を染めなせるが如し。途に太秦を過ぎて、廣隆寺を訪ふ。夕陽しづかに鐘樓の瓦を染めて、春ものさびし。茶店あれども、客來らず。少女は落花を風に任せて眠り、兒童は門の仁王に紙礫を打ちつけて去る。暮色は東山をこめ、叡山をめぐり、やうゝ鴨川に襲

*隱……穩

ひ來れり。清水の塔も半ば隱れぬ、大文字も姿を隱しぬ。紫に、紅に、藍に、墨に、見るゝ色どられゆく山影、淡く、濃く、青く、黑く、消え行く人影、いづれ詩中のものならぬはなし。天地たゞ平和、四圍たゞ寂寞。かへりみすれば西山もなく、北山もあらず。（雪月花）

三　春の箱根

幸田露伴

谷間

巖岨の　　氷柱を帶びて、
石葦の　　三冬を經しが、

春や春　　春の日さして、
谷深き　　その葉の光る。

山中雨後

雲斷れて　　谷間明るく、
雨の後　　老松嫩し。
山川の　　浪立ち騷ぐ
岩づたひ　　鶺鴒の飛ぶ。

塔の澤

玉水の　　檐にしづけく、
春の雨　　ひねもすに降る。

臆・憶

溫泉のにほふ　湯の山の溪、
小橋行く　　番傘黄なり。（日の出公論）

四　冰川清話

本名三冊

勝海舟

世に處するには、どんな難事に出會つても臆してはいけぬ。「さあ、何でも來い。」おれの體がねぢれるなら、ねぢつて見よ。」といふ料簡で事を捌いて行くがよい。さうすれば、難事が到來すればするほど面白みがついて來て、物事は造作もなく落著してしまふものだ。何でも大膽にかゝらなければいかぬ。どう

せうか、かうせうかと躊躇するやうになつてはもういかぬ。むづかしからうが、たやすからうが、斷然遂行するに限る。若し一度で出來なければ何度でも出來る處までやり通す。兎角世間の人は、事業の成功する前に、はや根氣が盡きて疲れてしまふから、大事が出來ぬのだ。

世の中の事は時々刻々變遷極りないもので、機來り機去り、その間髪を容れぬ。かういふ世界に處して、萬事小理窟を以て之に應じようとしても、それはとてもいかぬ。世間は生きて居る、理窟は死んで居る。

身方＝味方

通稱は平四郎。肥後の人。

此の間の消息を看破するだけの眼識があつたのはまづ横井小楠で、此の間に處して所謂氣合を制するだけの膽識があつたのはまづ西郷南洲だ。自分が、知人の中で殊に此の二人に推服するのは畢竟これがためである。

勝海舟

根氣が強ければ敵も遂には閉口して身方になるものだ。確乎たる方針を立て、決然たる自信によつて

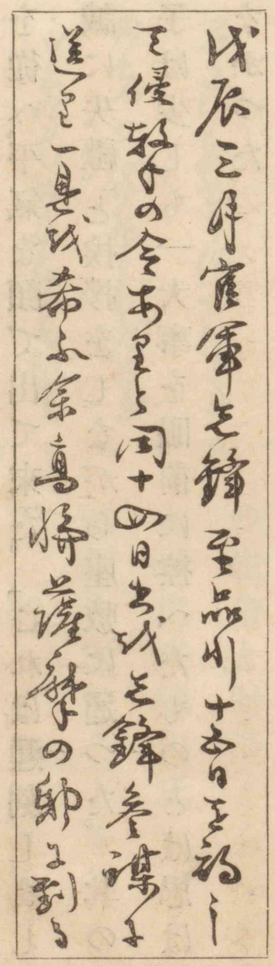
己・己・己

知己を千載の下に求むる覺悟で進んで行けば、何時しか我が赤心の貫徹する時機が來て、これまで敵視して居た人の中にも互に肝膽を吐露しあふほどの知己が出來るものだ。區々たる世間の毀譽褒貶を氣にするやうでは到底仕方がない。

そこに行くと、西郷などはどれ程大きかつたか分らぬ。高輪の一談判で自分の意見を容れたばかりでなく、江戸全市鎭撫の大任まで一切自分に任せて少しも疑はぬ。昨日まで敵身方であつたといふことは何處へか忘れてしまつたやうだ。其の度胸の大きいことには

自分もほとほと感心した。

其の時の模様を少し話すと、何でも官軍が品川まで推寄せて來て、いまにも江戸城へ攻入らうといふ騷



勝海舟筆蹟（亡友帖）

の際に、西郷は、自分が出した唯一本の手紙で、芝*田町の薩摩屋敷までその談判にやつて來た。

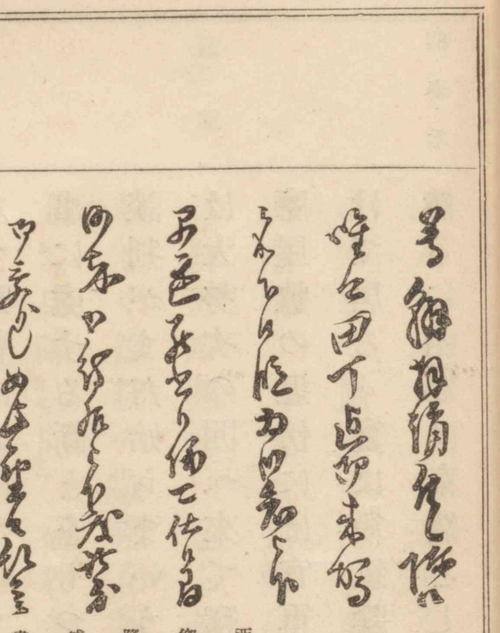
談判の當日、自分は羽織袴で馬に騎つて、從者を一人

*高輪はその邊の總稱。

連れたのみで薩摩屋敷へ出掛けた。まづ一室へ案内されて、暫く待つて居ると、西郷は庭の方から、古洋服に薩摩風の下駄をはいて、例の熊次郎といふ忠僕を從へ、平氣な顔で出て來た。「これは遲刻しまして誠に失禮。」と挨拶をしながら座敷に通つた。其の様子は少しも一大事を眼前に控へたものとは思はれなかつた。

挨……挨

さて愈談判になると、西郷は自分のいふことを一々信用してくれ、其の間に一點の疑念をも挾まない。「色々むづかしい議論もありませうが、私は一身にかけて御引受します。」とかういふのだ。西郷のこの一言で江戸百萬の生靈もその生命と財産とを保つことが出來、徳川氏も亦その社稷を保つことを得たのだ。若しこれが他人であつたら、「いや、貴様のいふ事は自家撞著だ。」とか、「言行不一致だ。」とか、「澤山の暴徒が



西郷隆盛書翰

あの通り處々に屯集して居るのに、恭順の實が何處にある。」とか、色々喧しく責立てるに違ない。萬一さうなると談判は忽ち破裂だ。併し西郷は流石にそんな野暮はいはない。よく大局を達觀する明と大事に處する斷とをもつてゐた。

談判がまだ始らないうちから、桐野などいふ豪傑連は、大勢次の間へ來て竊かに樣子を覗つて居る。薩摩屋敷の近傍には官軍の兵隊がひし〳〵と詰めかけて居る。實に殺氣陰々として、物凄い程であつた。然るに西郷は泰然として、あたりの光景は少しも眼

恭・泰・黍

に入らぬものゝごとく、談判を終へてから、自分を門の外まで見送つた。自分が門を出ると、近傍の街々に屯集して居た兵隊はどつと一時に推寄せて來たが、自分が西郷に送られて立つて居るのを見て、一同恭しく捧銃の敬禮を行つた。自分は自分の胸を指して兵隊に向ひ、「何れ今明日中には何とか決著致すべし。決著次第にて或は足下等の銃先に懸つて死ぬ事もあらうから、よく〳〵この胸を見覺えて置かれよ。」といひ捨てゝ、西郷に暇乞をして立歸つた。

此の時、自分が殊に感心したのは、西郷が自分に對し

送・贈

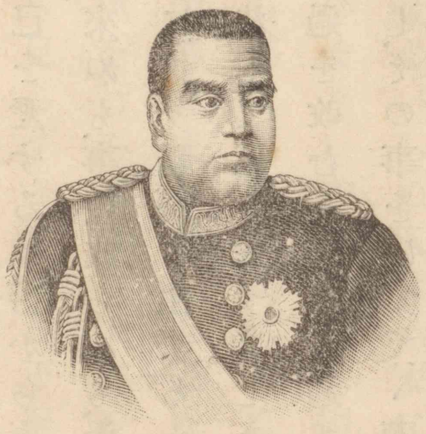
て幕府の重臣たるだけの敬禮を失はず、談判の時にも始終座を正して、手を膝の上に載せ、少しも敗軍の將を輕蔑するといふやうな風が見えなかつたことだ。その度量の大きいことは、いはゆる天空海闊(ひろ)で、見識ぶるなどいふことは、固より少しもなかつた。知識の點に於ては或は自分の方が上で、外國の事情などは卻つて自分が話して聞かせた位だつたが、その氣膽の大きいことに至つては、實に絶倫と謂ふべく、議論も何もあつたものではなかつた。（氷川清話）

闊＝濶
卻＝却

五　南洲遺訓

西郷南洲

事大小となく正道を蹈み、至誠を推し一事の詐謀を用ふべからず。人多くは事の差支ふる時に臨み、策略を用ひて一旦その差支を通せば、後は事宜次第工夫の出來る樣に思へども、策略の煩屹度生じ、事必ず敗るゝ者ぞ。正道を以て之を行へば、目前には迂遠なる樣なれども、先に行けば成功は早き者なり。



西郷隆盛

略＝畧

人を相手にせず、天を相手にせよ。天を相手にして己を盡し、人を咎めず我が誠の足らざるを尋ぬべし。己を愛するは善からぬことの第一なり。修業の出來ぬも、事の成らぬも、過を改むることの出來ぬも、功に伐り驕慢の生ずるも、皆自ら愛するがためなれば、決して己を愛すまじきものなり。過を改むるに自ら過てりと思ひつかば、それにてよし、その事をば棄てゝ顧みず、直ちに一歩蹈出すべし。過をくやしく思ひ、取繕はんとて心配するは、茶碗を割り、その缺を集め、合せ見ると同じ事にて詮なき事

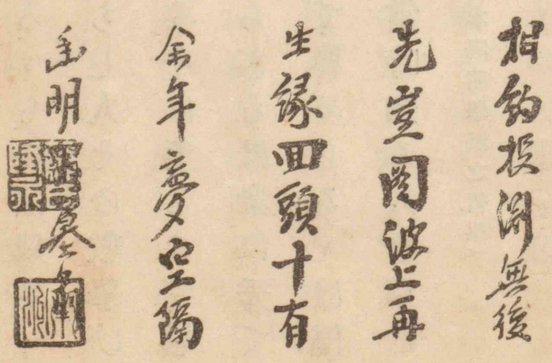
自愛
自重

慢……漫
蹈……踏

なり。

命もいらず、名もいらず、官位も金もいらぬ人は始末に困るものなり。この始末に困る人ならでは艱難を共にして國家の大業は成し得られぬなり。

道を行ふ者は天下擧つて毀るも足らずとせず、天下擧つて譽むるも足れりとせず。自ら信ずるの篤きが故なり。



西郷隆盛筆蹟

天下後世までも信仰悅服せらるゝものは只是一箇の誠なり。古より父の仇を討ちし人その數擧げて數へ難き中に、獨り曾*我兄弟のみ今に至るまで兒童婦女子までも知らざる者のあらざるは、衆に秀でて誠の篤き故なり。誠ならずして譽めらるゝは僥倖の譽なり。誠篤ければ、たとひ當時知る人なくとも後世必ず知己あるものなり。（日本陽明學派之哲學）

*曾我十郎祐成・五郎時致、父の仇工藤祐經を富士の裾野に殺す。

六　日蓮上人

高山樗牛

日蓮上人は獨り鎌倉時代のみならず、日本歷史上各時代を通じて類稀なる豪傑なり。實に上人は宇宙間第一の眞理なりと自ら確信せる法華經の大義を唱へて滿天下の衆生を救はんとの大願を起し、この大願の前には如何なる迫害を被るともびくともせじと覺悟し、「法華經のために此の臭き頭を刎ねられんは、沙に黃金を換へ、糞に米を代ふるなり。」と喝破し、眼中權勢もなく、威武もなき、眞に高天闊地獨立獨步の大豪傑なりき。さりとて、豪邁なる膽氣のみありて、溫柔なる人情に乏しかりしかといふに、大いに然らず。上人が人情に篤く、恩誼に深く、その情時とし

沙＝砂

ては禽獸の末にまでも及びしことは、後世の人をして感涙に堪へざらしむるものあり。今左に一二の例を擧ぐべし。

上人の信者に四條金吾とて江島遠江守の老臣ありき。この人、武士の身分ながら、夙に妙法に歸依して上人の門下に列り、不惜身命の覺悟を以て、上人と共にもろ〳〵の迫害を被れり。上人龍口*にて斬られんとせし時は、路上に馬の轡を執りて慟哭し、刑場に從ひて殉死せんと決心せり。上人は深く此の人の節義に感じ、後年幾多の消息文は常に藹然たる恩愛

*相模國鎌倉町の西一里餘。北條時賴日蓮を龍口に斬らんとせしが、子時宗になだめられ、死一等を減じて佐渡に流す。

の情を湛へたり。就中「殿にして、若し死後地獄に墮せられなば、日蓮も亦共に地獄に墮すべし。たとひ釋尊及び十方の諸佛、手を引き袂を捉へて淨土に迎ふとも、ふりかへつて必ず殿と共に地獄に墮すべし」。との意を述べられたり。その恩愛の濃かなることは喩ふべきものなし。天下の威武を敵として一歩も

日蓮（東京帝室博物館藏）

退讓することなき大丈夫の上人にして、他面に於てこの兒女の涕涙ある、殊に貴ぶべきを覺ゆ。

上人が親を思ふ心の切なる、六十年の生涯を通じて最も明かに現れたり。殊に晩年、日本六十六箇國の内に、五尺に足らざる身一つを置く處なくして身延山の深谷に隱るゝや、九箇年が間五十餘町の嶮山を、一日に一度は必ず攀ぢ登りて、遙に上人の故鄕なる房州を煙波の間に望み、經を捧げて父母の恩を拜謝せしが如きは、古今東西の如何なる孝子傳の中にこれと比較し得べき美談あるか。

上人病篤くして甲州の身延より武州池上に移る時、身延山所領の檀越波木井氏より乘馬一匹に舍人一人を添へて遣はされけり。上人この馬をこよなく愛せられ、池上に著きて波木井殿に送る書の中にも馬をいろ〳〵いたはしく思ふ旨を書かれ、終りに「知らぬ舍人を附けて候ては覺束なく覺え候。罷歸り候はんまで、この舍人を附けおき候はんと存候」と遊ばされたるなど、自身の病苦を厭はず、偏に一匹の馬を慈しむ情、たとしへなく貴からずや。

眞の豪傑は人の爲し難きことを爲すと同時に、人情

に篤く、恩愛に濃かなるものなり。能く人に忍び世に戻るをのみ偉人の業と心得るは、豪傑の半面を遺れたるものなり。この情愛なくばかの豪邁もあらじ、かの豪邁あればこそこの情愛もあるなれ。二者表裏し融會して、こゝに豪傑の全人格を造るなり。かの美はしき薔薇の織物を見ずや、表に花と刺と別別に織成さるれども、その裏面を見れば、花を織る絲即ち刺を織る絲なるにあらずや。（樗牛全集）

七　音訓

傳……傳
遺……遺

漢字ノ我ガ邦ニ入リシ時代ハ詳カナラズ。サレド、應神天皇ノ頃ニハ、百濟ノ博士來リテ皇子ニ書ヲ授クルコトヽナリ、學習ノ道モ漸ク開ケシガ、イクバクモナクシテ支那トノ交通次第ニ盛ニナリ、支那南方ノ音ヲ傳ヘタリ。コレヲ吳音トイフ。

行狀（ギヤウ）　經文（キヤウ）　京都（キヤウ）　平和（ワ）　繪馬（エ）

推古天皇以後、遣唐使留學生ノ彼ノ土ニ赴クヤ、ミナソノ都、長安ノ音ヲ傳ヘタリ。コレヲ漢音トイフ。

漢音ハ支那北方ノ音ナリ。

行李（カウ）　經書（ケイ）　京師（ケイ）　混和（クワ）　繪畫（クワイ）

當時、我ガ邦ニテハ頻リニ唐ノ文化ヲ輸入スル時ナリシカバ、朝廷ニテハ盛ニ漢音ヲ奬勵セシガ、吳音ノ傳來舊クシテ、久シク邦人ノ口耳ニ慣レタレバ、全ク廢絶スルニ至ラズ。ソノ結果、儒書ハ大槩漢音ヲ以テ讀ムコトヽナリタレドモ、佛書ハナホ多ク吳音ヲ用ヒ、後世ニ至リテモ、普通語ニハ、吳音ヲ用フルモノ頗ル多シ。

槩＝概

カク、吳音トイヒ、漢音トイフモ、悉ク支那原音ノマヽニハ非ズシテ變化セシモノ往々アリ。コハソノ傳習ノ際ニ於テ、自然ニ變化セシモノナルベケレドモ、マタ多少邦音ニ適スルヤウニ改メタルモアルベシ。」

吳音・漢音既ニ行ハレタル後ニ於テ、宋ヨリ以來、彼我僧侶ナドノ來往セシモノ更ニ彼ノ邦ノ音ヲ傳ヘタルアリ。是ヲ唐音トイフ。コノ唐ハ唐代ノ意ニアラズシテ、タヾ唐土トイフ意ナリ。但シ唐音ハアル少數ノ文字ニ止レリ。

行燈（アン）　看經（キン）　南京（キン）　和尚（ヲ）　亭（テイ）　鈴（レイ）

近時、支那トノ交通頻繁ナルニ從ヒ、今日ノ北京音ヲ傳ヘタルモノアリ。是ヲ支那音トイフ。コノ支那音モマタ地名等ニ用フルノミニテ、多クハ行ハレズ。

北京　廣東　上海　哈爾賓

漢字ニハ、音ノ外ニ訓アリ。訓トハ漢字ヲ國語ニ譯シテ讀ミタルモノナリ。故ニ又訓讀トモイフ。コノ訓ハ、始メテ漢字ヲ讀ミ、ソノ字義ヲ譯セシヨリ以來、數十人ノ手ヲ借リ、數十百年ヲ經テ、漸次ニ定マリシモノニテ、一人・一代ニ成リシモノニ非ザレバ、ソノ人、ソノ時ヲ指定スルコト能ハザルナリ。

訓ニハ正訓アリ、意訓アリ。正訓トハソノ字ノ本義ノマヽニ國訓ヲ附シタルモノニテ、之ヲ分チテ二類トス。第一ヲ一字ノ正訓トシ、第二ヲ二字ノ正訓トス。

日　月　山　川　草　木　鳥　獸

ノ如キハ第一類ニ屬スルモノニテ、コレ字訓ノ正則ナルモノナリ。

從弟　伯父　叔母　海苔　所以　加之

ノ如キハ第二類ニ屬スルモノナリ。近來、漢字ニ西洋語ノ訓ヲ附スルモノアリ。

隧道　燐寸　喞筒　麵包

ノ如キ是ナリ。コレ亦正訓ノ第二類ニ屬スルモノナリ。

隧・墜・墮

意訓トハソノ字ノ本義ニアラザレドモ、意ヲ以テ國訓ヲ附シタルモノニテ、之ヲ分チテ二類トス。第一ヲ一字ノ意訓トシ、第二ヲ二字以上ノ意訓トス。

戌・戌・戌・戌

子　丑　寅　卯　辰　巳　午　未　申　酉　戌　亥

ノ如キハ、第一類ニ屬スルモノナリ。十二支ハモト動物ノ名ニ非ザレドモ、後ニ動物ニ配當セシニヨリテ、「ネ」「ウシ」「トラ」「ウ」ノ如キ動物ノ訓ヲ附セルコトヽナレリ。

草臥　七夕　團扇　流石ニ　五月蠅シ

ノ如キハ第二類ニ屬スルモノナリ。コレ「タナバタ」(棚機)トイフ國語ト七夕トイフ漢語トハ、全ク同ジキモノニ非ズ、「ウチハ」(打羽)トイフ國語ト團扇トイフ漢語トハ異ナルモノナレドモ、大槩相似タルヨリ、意ヲ以テ之ヲ當テタルモノニテ、ソノ間、多少ノ逕庭ナキコト能ハザルナリ。

音ト訓トノ別アルコト、大略此ノ如クナレバ、漢語ノ熟字ハ音讀スル時ハ二字共ニ音讀シ、訓讀スルトキハ二字共ニ訓讀スベシ。タヾ國語ト漢語ト聯合シテ熟字トナルトキハ、音訓交ヘ讀ムコトアリ、敷地・奥

イクラカ
サウ牛

行ノ類是ナリ。又正則ニ非ズシテ音訓交ヘ讀ムコトアリ。音ト訓トヲ合セタルヲ重箱讀又ハ合羽讀ト云フ、團子・出立ノ類是ナリ。訓ト音トヲ合セタルヲ湯桶讀トイフ、小僧・身分ノ類是ナリ。コレ正シキコトニハ非ザレドモ、習慣アルモノハ、亦從ハザルベカラズ。（漢字要覽）

八 道話一則

柴田鳩翁

さる御町内に婚禮振舞がござりました。お年寄をはじめ、町役・家持の人々、一同に座に就きますると、様

壺＝壺・壷

様の馳走がある。時に、かの年寄は、酒と聞いては笹の露にも醉ふ程の下戸ぢや。座中を廻る杯の間、退屈さうにしてゐられると、亭主方が氣の毒に思ひ、「お年寄様は御酒は召しあがらず、御退屈にござりませう。ちと、お菓子なりとも御取りくだされい。」と、南京の古染附けの壺に大りんの金米糖を入れて年寄の前へ持つて來る。座中も「これは好いお心附、ひらにお菓子を召しあがられい。」とすゝめる。年寄もわるうはなし、「然らば頂戴を致しませう。」と、壺を引きあげ、手首を突込みしなに少しきしむやうに覺えたが、無

理に手を差入れて撮み出さうとするに、手首がつまつて拔けませぬ。どうぞして拔けるかと、色々にこじまはして見ても、ひつぱつて見ても拔けず、まごまごして居らるゝと、側から見つけて、「どうなされましたぞ。」「いや、手が少しつまりまして思ふやうに拔けませぬ。」と眞顏になつていはるゝ。「それは氣の毒。私が壺を持つて居りませう。無理無體に手をお引きなされ。」と、一人が向へまはつて壺をつかまへ、あとへ引くと、年寄は手を前へ引く。互にえいやと引合ふ有樣、景清と美保谷が鋸曳をするやうなと、座中が一

(一)惡七兵衛平景清。
(二)美保谷十郎。

同にどつと笑へど、年寄はなか〳〵笑はず、泣顏になつて、「どうも痛んで拔けませぬ。」といふ。さあ、これから大騷になり、「醫者どのを呼んで來い。」接骨ではいくまいか。」と、酒宴の興も醒めはてました。

時に五人組が一人進み出で、「いづれもお騷ぎなされな。我ら承つたことがある。昔、司馬溫公といふ人、幼きとき、大勢の小兒と共に大きなる壺のほとりに遊びましたが、一人の小兒、誤つてかの壺の中へはまりました。大勢の子供はこれを見て逃げ歸つたが、司馬溫公一人は歸らず、傍なる手頃の石を取つて、か

*名は光、宋の大儒。一六七九―一七四六。

の壺へ投附けましたれば、壺は割れてはまつた小兒は不思議に命を助りました。』と或人の話ぢや。今お年寄の御難澀は、この話によう似てある。いざや、我らが司馬溫公となつて、たとへばその古染附けの壺が、失禮ながら何程高金の品でも、お年寄の腕には換へられぬ。」と、しかつべらしく煙管を提げ、向へ廻れば、年寄は氣の毒さうに、壺をかぶつた手を突出すと、只一打に打碎いた。何が、座中は金米糖が散らかつて雪を降らした樣になると、「やれ、お年寄お助りなされたか。」と其の手を見れば、拔けぬこそ道理なれ、金米糖

澀＝澁

を一杯つかんで居られたと申すことぢや。何と、をかしい話ではござりませぬか。

つかんだものを放しさへすれば、自由自在に手は拔けたものを、一度つかんだら首がちぎれても離すまいと片意地なうまれつき、それで自由自在の大安樂が出來ぬのぢや。かく申せば金錢の事のやうなれど、つかむものはこれぱかりではない。器量のよいのをつかみ、賢いをつかみ、負けをしみをつかみ、家柄をつかみ、身代のよいのをつかんで離すまいとかつぎ歩くによつて、教を聞く事もならず、樂をする事も

ならず、憤も出來ず、せん方なさに癪氣抑へたり、顏しかめたり、酒飲んで紛らしたり、さりとては氣の毒なものでござります。壺割つて仕舞うてからは、何いうても詮ない事ぢや。身代の壺を割らぬさき、御用心が第一でござります。（鳩翁道話）

九　にはとこの花

首夏風　祝部敦子

朝戸出のまなこに花ちりそめて
風なほうしき春をまちけり

秋雨　小出榮

夕日さしあまねきぐうへにうつりきわ
うしきばうの秋の雨

陰雪　伊東祐命

雪をはらみ陰りそめたる風の
あらばづみ弱き雪まじ

曙花　高崎正風

春のよの月にのこりて山
ぢうつりゆく花の影

一〇　杜鵑を聞く

瀧澤馬琴

庚子四月十五日の朝、杜鵑のはじめて鳴くを聞きぬ。立夏後十日なり。去年は立夏の日より鳴きぬ。去年より十日後れたるは季節の遲速あればなるべし。

瀧澤馬琴

吾この鳥の聲を聞く毎に、故兒琴嶺の事を思ひ出でて、悒々たり。物によりて懷舊の情あること、人皆然り。景によりて情起り、情を以て景を思ふ。脆きは人の心なるかな。（著作堂雜記）

(一)天保十一年。

(二)天保六年五月七日歿。

一一　札幌農園

菊地幽芳

札幌に於て最も詩趣に富める地を求むれば、蓋し札幌農園か。札幌農園は農科大學に附屬せるものにして、實に我が邦の模範農園たり。農園としての設備完全なるに近きのみならず、地は卽ち石狩平野の一部なるが故に、到底內地に於て求むべくもあらぬ廣大なる地域を領し、凡百の施設整頓して些の遺憾を感ずるなく、經營の手腕は縱橫に發揮せられて餘

蓋＝蓋＝蓋

唯…惟…誰

蘊なきに近し。農園としてかくのごとく完全なるは蓋し尠からん。然れども余はこゝに農園の設備を說かんとするものにあらず。余の記さんとする所は唯その風致にあり、農園の粹たる廣き牧場の風致にあり。

西北の二面全く開け、平野遠く連なりて、西は遙かに札幌の障屏をなせる連山の紫翠に接し、北は石狩原野を指してその涯際を知らず。萋々たる牧草氈の如き處、こゝにはかの林中の雜樹の互に相凌ぎ相排するが如きことなく、廣き空閒を占めて處まばらに

凌…陵

鬱…欝

立てる楡ありて、晝は殘る隈なく日の光を浴び、夜は思ふがまゝに星の雫を受く。何に遮らるゝものもなきその根は、太古のまゝなる土壤より潤澤なる養分を吸ひ取りて、鬱蒼たるその枝葉は以て百步の地を蔽ひ、亭々たるその幹は以て百尺の空を摩するを見る。一たび足をこの農園の牧場に入るゝもの、誰か遺憾なく發揮せられたる此の楡の美に驚嘆せざらん。

それ廣漠たる平野の緣は既に人の心を快闊ならしむるに足る。これに喬木の亭々たるを配する時、誰

か一段の風致を添へ來るを覺えざらん。唯その喬木の種類によつてはまたその風致に多少の增減なき能はず。思ふにかゝる平野を飾るに適せる樹木は、松にあらず、杉にあらず、實にその高さと共に深さを有し、深さと共にまたその幅を有するもの、分明に云へばその枝葉十重二十重に密生し、鬱然として晝猶暗き樹陰を作る喬木たらざるべからず。請ふ、かくの如き喬木の森々として青綠の平野に立てる樣を想像せよ。何ぞその晝の如くにしてまた詩の如くなるや。人若し十分にかゝる想像を回らすこと

密…蜜

を得たりとせば、其の人は卽ち遺憾なく札幌農園を其の腦に描き得たるなり。

農園が楡によつてその風趣を加ふること斯くの如し。然れどもこれなほ靜態における風趣のみ。更に此の閒に牛を點じ、馬を點じ、羊を點ずるに至つて、農園の眞風趣は始めて動態となりて活躍す。

丈高く、四肢長く體軀驚くべきほど巨大にして、黑白の斑を有せるホルスタイン種の牛が、その大樹の下に、一は横たはり、一は立てる、或は長方形の體軀をなせる赤色の短角牛、眼柔しく四肢短きエイアシャー

種の牛等が此處に彼處に草を食へる、或はさまよへる、或は尾をふれる、更にうるはしき毛を被れるメリノ種の羊が、その角の大にして曲れるには似ず、いと優しき眼光もて馴々しく近づき來るを見ずや。若し此の世に樂園といふものありとせば、その關門は實に斯くの如き處なるべし。

その繪畫的なる、その詩的なる、また附近の建物と相待つてその米國的なる、少くともこゝに來るものは、內地の光景と甚だしく相隔れるを感ずるならん。

札幌農園は實に斯くの如き特色を有す。余は斯くの如き農園を自然の師として學べる學生の幸福を祝し、また此の學校より往々文章の士を出せることの決して偶然にあらざるを知れり。（日本海周遊記）

一二　上毛の三山

松本亦太郎

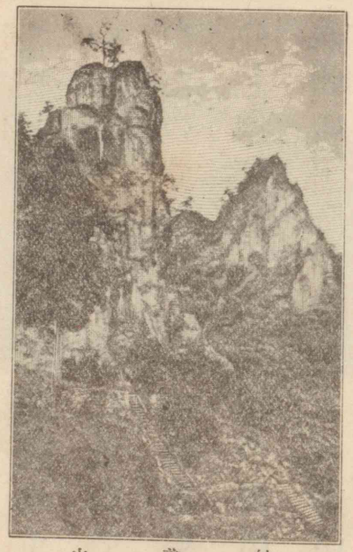
赤城・榛名・妙義の三山は我が故郷の高崎あたりから見ると、造物主の描ける風景畫の如く、東北西三方に展開して居て、其の背景には一方に子持・小野子、一方に淺間を始め信越の諸山が遠近に見え、西南の側面には秩父の連山が起伏して居る。そして更に小高

氷

い丘から眺めると、赤城の背後に日光の山脈があり、ずつと東南の端には筑波の峯が夢の如く淡く大空に浮いて見える。更に碓氷嶺の中腹から眺めると、關八州の平野は上毛の三山から逆落しに東南に開けて居つて、眼界の終點を筑波が守つてゐる。其の平野の間を銀の瀧の如く蜿蜒とうねつて行くのが阪東太郎の奔流である。此の川が赤城山の裾野を縫つて流れる時は水勢が極めて急である。妙義の麓には碓氷川が迸り、榛名の烏岩からは烏川が噴出するのであるが、赤城十三里の裾野に利根川の帶を

延ばした雄大なる配合には及ばない。」

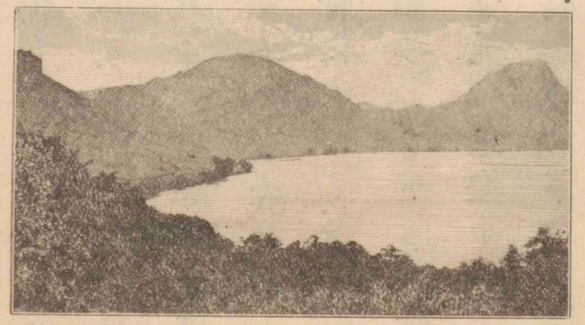
妙義山も太古はもつと優しい容貌をして居つたのだらうが、雨に風に暴され、土や砂が悉く洗ひ去られたため段々露骨になつて、遂に天に嚙みつきさうな嶮しい姿になつたのだらうと、我々素人は想像する。



妙義山

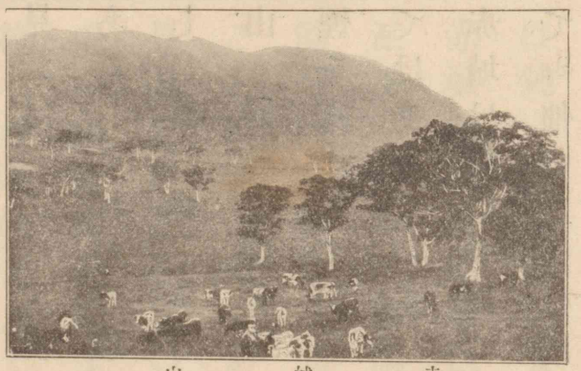
兎に角、鬼斧神工の不思議なるには驚歎せざるを得ない。人間に譬へたら、まづ畸人といふ格だらう。

榛名は羣山の堵列である。背後の山が南へ押し出して來るのを喰止めようとして、前の山々が兩腕を張つて防禦したため、腕と腕とが癒著してあゝいふ屏風形のものになつて仕舞つたのであるまいか、これも素人の想像である。信越の高山や、關八州の平野を眺めるに、好い地位を占めて居る。溫泉もあり、湖水もあり、山に登つた時の心持は存外好い。人間なら



榛名山

鄉黨相寄るの姿である。



赤城山

山容の最もよく整ひ、姿の佳麗にして氣品の如何にも高貴なるは、何といつても赤城である。何十萬年の昔だか分らぬが、あそこの地殼が偶然破裂して、其所から凄じい勢で電光の閃めく火炎が高く天に立騰り、やがて其の火炎は傘の如く天上に廣がり、岩石土灰を降らし、天地晦冥、天柱折れ地維缺

色彩ノ美

姉＝姉

くる如き大騷動があつた。其の騷動の靜まつた時、見ればそこに天女の如く優しく坐つて居たものがある。それが赤城山である。赤城山の形の最も美しい處は袖と裾を長く曳いて居る點にある。淺間山も同樣な騷ぎをして生れ出たのであるが、まだ火煙を吹出して居る處から見れば、赤城は姉、淺間は弟ではあるまいか。

赤城は眉目秀麗である許りで無く、其の色の美に於ても他の二山に勝つて居る。妙義を近く碓冰の方から見れば、一日中何度も變化するが、高崎あたりか

互：亘

ら遠望すると紫紺の色に見えることが多い。榛名は鈍い藍鐵色になつて居ることが多い。けれども赤城は淡紅色・藤色・櫻色あたりの色調で、上品で、而も派手である。信濃の國境から上野に亙つては風が隨分强く吹く。其の爲め淺間は髪を搔亂して居ることが多いのであるが、赤城は寢亂れ髪の姿を人に見せたことが無い。いつもゆつたりと端坐して上毛の山野に君臨する趣がある。

榛名・妙義は都人士に昵近し、彼等に媚を呈して居るのであるが、赤城は童貞の清潔を保ち、寧ろ世の中か

ら遠ざかつて居る。從つて赤城は都人士に知られることが割合に尠い。余は赤城に都人士の餘り多く入込むことを望まない。名山は寂しい靜かな境を守つて居る方がよいと思ふのである。（學生）

一三　「世界之無線電信」を讀みて　島村速雄

「世界之無線電信」御稾本御送附に預り候處、時節柄にもあり、且は御出版御急ぎの事と察し、緩々拜讀の餘暇を得ざるは遺憾の至りに候へ共、其處此處と拾ひ讀み致し候ばかりにても尠からざる興味を覺え申候。

電信の、戰爭に至大なる影響を及し候事は疾く人の知る所にこれあり、今回の戰役に於ても、大山元帥が南滿洲一面に蜘蛛の網の如く張られたる電信、電話線をとほして、日夕諸方面よりの情報を得られ、數十萬の大軍を指揮して古今未曾有の大勝利を收め居られ候事は、誰も想像致得る事と存候へども、東鄕大將が海上に於て目に睹ること能はざる電波を驅つて、數十隻の艦艇を手足の如くに指揮して居られ候事は、一寸

網……綱

鎖＝鎖

世人の想像の及び難き事かと存候。

昨年數箇月の間、旅順口を封鎖致候節などは、大將は大抵常に同地より數十里の海面に居られたる事に候が、旅順港外に配置せる我が哨艦より無線電信により日夕敵の情報を受けられ候へば、端船の港口出入に至るまで殆ど手に取る如くに承知せられ候のみならず、攻圍軍日々の通報の如きも、大連灣碇泊の中繼船を經て、やはり電波の力により斷えず承知せられ、大將も之に應じ、また電波を介してそれ〴〵我が艦隊を

指圖せられたる次第にこれあり候。

且此の無線電信は陸上電信線による通信の如くに獨り發信者と受信者との間にのみ通じ候にてはこれなく、電信機械を備へをり候各艦へ同時に知れ渡り候事なれば、各艦とも新聞號外の類を待たず時々刻々新しく且活きたる情報を即座に承知致得る次第に候へば、長日月の間、困難なる封鎖勤務に於て全軍に些少の倦怠をも生ぜしめずして相濟みしは、主として無線電信の賜と相感じ申候。他年若し當時各艦より

發せる無線電信の一日分のみにても一讀致候はゞ、趣味津々たるを覺え申すべしと存候。而して我が海軍の無線電信をして右の如くに有效ならしめたることは、貴下多年御盡力の功多きに居る事と只管敬服致居候。惟ふに本邦に於ても無線電信の事を研究せる人士尠からざるべし。さりながら、時局の必要に迫られ、專心一意、學理と實驗とを合せて、貴下ほど十分に此の事を研究せる士は恐らくはまた他にこれあるまじく、而して今其の人によりて斯の學の

効＝効

好著述世に出で候事は、誠に科學界の幸福にして、定めて非常なる歡迎を受けられ候はんと今より期待致居候。

「殊に貴下が序文に於て、此の最も新しき科學の發明に係る巧緻なる機械を、最も古くより傳來せる大和魂を以て今はの際まで泰然として使用せし軍艦吉野無線電信係下士卒の忠烈なる事蹟を紹介せられたるは、最も會心の點にこれあり、ひとり小生が當時の事を回想して「亡友佐伯大佐も定めて地下に滿足致候はん」と喜び候

(一)明治三十七年五月十七日軍艦吉野渤海にて沈沒せる時竹村兵曹・小山水兵最後までよくその任務を盡せり。

(二)吉野艦長佐伯閣。

のみならず、此の事蹟たるや、教育上の注意によりては、科學の進歩が決して我が大和魂に何等の障礙ともなるものにあらざることを事實に證明致候ものにて、識者の擧つて感謝すべき事と存候。

抑、小生共は日夜無線電信の恩澤に浴し居りながら、其の原理の如きは今に了解に苦しみ、卻つて他の感想に馳せ候事も尠からず。「開戰以來我が四千餘萬の同胞が各其の分に應じて義勇公に奉じをる至誠天に通じ、一種靈妙にして物

奮……舊

質界の電波に對比すべき正氣の波動を起し、出征軍隊と後援國民との間に互に感應して、かく都合よく戰局を進めをるにあらずや。而して其の氣の凝るや、恰も電氣の結んで雷電となるが如く、或は奮激死に赴く決死隊となり、或は從容死に就く吉野無線電信係となり、壯烈鬼神を泣かしむる幾多忠勇の士を現しをるにあらずや。」などの感想を起し候事にこれあり候。

餘事はさておき、貴著に對し、序文の御求に預り候處、これはとても小生のがらになき大役に御

座候間、平に御斷り申上候。尤も此の俗文中に記載致候事柄にして、何等かの御役に相立ち候ものもこれあり候はゞ、御隨意に御使用下さるべく候。先は他に先だつて、貴著拜讀の光榮を得候事の御禮、且は昨年來度々の御懇書殊に珍しき外國新聞紙の御惠贈に對し、何等の御挨拶をも申上げざりし闕禮の御詫を兼ね、右申述候。時下不順の候、益〻御自愛斯の學の御研究を重ねられ、遠からず貴著標題に二字を加へ、「世界無比之無線電信」を我が海軍に貢獻せられんこと、切望の至に御座候。敬具。

明治三十八年五月二十五日夜、時々刻々「波羅的艦隊見ゆ」との無線電信を待ちつゝ軍艦磐手電燈の下に於て、

島村速雄

木村駿吉先生

（世界之無線電信）

一四　日本海の海戰その一

新保磐次

さる程に、五月二十七日の曉天に、南方の哨艦たる假裝巡洋艦信濃丸の無線電信は「敵艦隊見ゆ。敵は東

踊＝踴。

水道に向ふものゝ如し。」と報ぜり。全軍これを聞いて、踊躍し、各豫定の持場を固めたり。午前七時哨艦和泉も敵を發見して、其の勢力・陣形・針路等を本隊の旗艦三笠に報じ、其の儘、敵の艦隊と接觸を保ち、時々刻々の動靜を報じつゝ、北東さして進航せり。かゝる間に、片岡中將・出羽中將・東郷少將の引率せる諸艦隊も次第に現れ來り、屢〻敵の砲擊を受けながら能く接觸を失はずして、對馬の東なる沖の島附近まで敵を誘致せり。

此の日、海上濛氣深くして、五海里以外は黑白も見え

分かざりしかば、敵はこれを幸に、我が艦隊の目を暗まして浦潮の方に遁れんと思ひしに、我が諸艦の報告によりて、數十海里を隔てたる敵の進退・動靜の一一我が旗艦に映ずること、鏡をかけて見るが如くなりき。沖の島に至るまでは、兵士皆戰鬪配列に就きながら、隨意休憩を許されたるが、準備終りて、上官の巡視せし時には、兵士等、砲彈等を枕にして、鼾の聲雷の如くなりき。古今の大戰を前に控へて敵前にありながら、物とも思はぬ、この沈著なる膽勇を見て、司令官を始め深く歎稱し、「軍にははや勝ちぬ。」と賴もし

く思ひけり。

かくて我が本隊は午後二時沖の島附近に敵を迎へ、遙かに彼方を見渡せば、豫て諸艦の報ぜし如く、敵は二列縱陣にして、主力の四戰艦は右翼列の先頭にあり、司令長官の旗艦スワロフ眞先に進み、又オスラビヤ以下の四戰艦は左翼の先頭たり、海防艦・巡洋艦・特務艦船等次第に濛氣の中より現れ出で、其の長さ數海里に亙れる有樣は、實に世界の壯觀なりき。

午後二時に近く、戰機已に熟しぬ。旗艦三笠の檣頭に大戰鬪旗の颯と飜るや、戰鬪の號音勇ましく、旗艦

熟……塾

は全艦隊に對して、「皇國の興廢此の一戰に在り。各員一層奮勵努力せよ。」と信號旗を揭揚せり。この信號はネルソン(一)がトラファルガル(二)の海戰に、「英國は諸君の努力を要求す。」といひける信號と同じく、忽ち世界に傳誦せられたり。

こゝに於て我が主力隊は東鄕大將直率の主戰艦隊を先鋒とし、上村中將の裝甲巡洋艦隊これに續きて、吉例の單縱陣を布き、正にこれ大鵬の雲に翰つが如く、巨鯤の浪を破るが如く、驀地に敵前に出で、出羽・瓜生・東鄕(少將)の諸戰隊は遶りて敵の後尾を衝かんと

(一)一七五八―一八〇五。
(二)一八〇五年八月二十一日。

す。

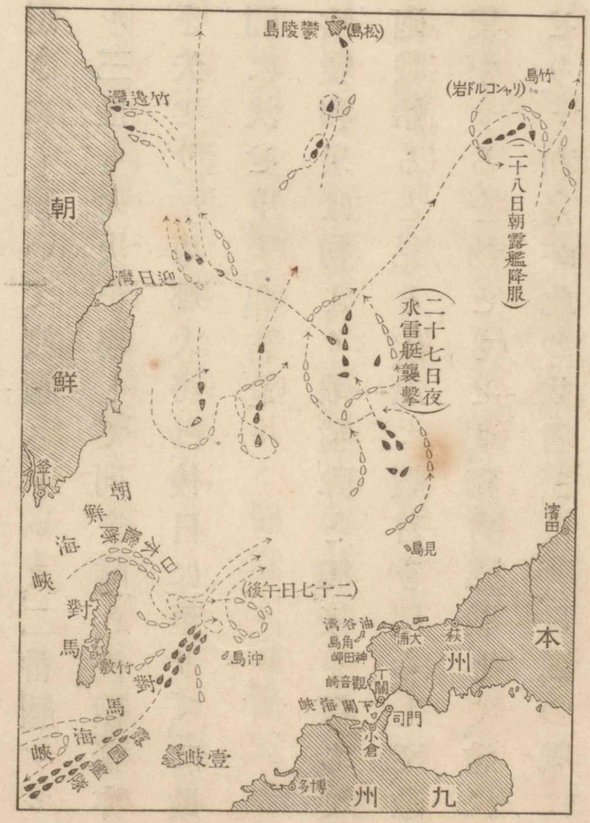
敵はかくと見て直に發砲を始めたれど、我が艦隊は靜まり返つて應砲せず。射距離六千米突に入るや、斜に敵の前頭を横ぎりて敵と丁字を成せる我が主力隊は、茲に一齊に敵の兩先頭艦に砲火を集中したれば、敵の諸艦も劣らじと應戰し、砲聲天地を碎くが如く、海水湯の如く沸返れり。此の日西風烈しくして砲煙海面に漲り、濛氣と相合して四顧冥々たり。物すごきこと言ふばかりなし。されども我が陣形の優越と技術の熟練とは殆ど百發百中にして、敵の左翼先頭艦オスラビヤまづ大火災を起して戰列を退きぬ。續いて、旗艦スワロフ、二番艦アレキサンドル三世も火災を起して列を離れ、後續艦亦續々と火を失せり。東郷大將は、後日に至りて、「勝敗已に此の間に決せり。」と報告せり。

哨艦和泉は初より敵艦隊と觸接を保ちて來りしが、砲戰始ると見るや、急に艦首を回らして、敵の砲火の集中するを物ともせず、獨力應戰して、遂に本隊に合せり。和泉が此の武者振は昔、長滋の戰に、本多忠勝が手兵三百を以て豐太閤の數萬の軍と竝び行き、遂

(一)天正十二年四月。
(二)一三〇八―一三七〇。

に家康の軍に合したるに似たりとて、皆人歎稱したりけり。

かくて敵は北上の道を遮られ、只南東にと壓迫せられしが、かくては目的を達すべき道なしとや思ひけん、俄かに北方



迴＝廻

に回頭し、死物狂の勢を以て我が後尾に迴り出でんとしければ、我が主戰艦隊も急に十六點回頭をなし、北西に向つて敵の前頭を壓し、裝甲巡洋艦隊は分れて敵の側面に出で、敵を中にして殆ど乙字を畫き、益〻猛射して再び敵を南方に壓したり。

勢かくの如くなれば、敵は北方に血路を開かんこと遂に協はじとや思ひけん、次第に南方に遁るべく見えければ、我が主戰艦隊・裝甲巡洋艦隊・諸戰隊、此處彼處に分れて、「餘さじ、洩らさじ。」と掩擊せり。されば、前に戰列を離れたるオスラビヤ・スワロフ・アレキサン

ドル三世を始め、戰艦ボロジノ・特務艦ウラル等破壞沈沒する者少からず。此の間、鈴木・廣瀨の驅逐隊が白晝、壯烈なる水雷攻擊を決行せしは特に記すべき所なり。

かゝる間に夕陽已に黃海に沒し、豫て定められたる驅逐隊・水雷艇隊、東・南・北の三面より漸次に敵に迫りければ、我が主戰隊は戰場を新手に讓り、全艦隊一時引揚げて、明朝、鬱陵島に集合することゝなり、此の日の軍は果てにけり。

豫て夜戰は水雷攻擊と定めしかども、朝來、烈風激浪を揚げ、夜に入りて波浪未だ收らず、水雷艇の不利甚だしかりき。されど、此の千載一遇の戰に一擊を試みずんば、生殘りても何かせんと、驅逐隊・艇隊は、日沒前より來集し、先を爭ひて敵に當れり。敵は探照・砲火を以て極力防戰し、白虹・紫電、雨の如く海中に飛ぶ。夜戰の壯觀譬ふるに物なし。我が襲擊隊爭でかこれに擬議すべき、一時に突進して敵の周圍に蝟集肉薄し、其の攻擊の猛烈なること殆ど言語に絕しければ、敵艦應接に遑なく、而も其の距離餘りに近かりしため、備砲俯角の度を過ぎて、照準を取ること能はざ

りき。此の夜戰に、敵の戰艦・裝甲巡洋艦等の、或は沈沒し或は、戰鬪力を失ひしもの亦多く、これによりて敵の陣形全く亂れたり。而して、我が水雷艇も亦三隻を失ひぬ。

霽…晴

一五　日本海の海戰その二　新保磐次

明くれば二十八日、きのふの濛氣などりなく霽れて沖の鷗も見逃すまじく、追擊戰にはこの上もなき好天氣なり。諸戰隊皆豫定の如く、黎明より鬱陵島集合の途に在りしが、早くも敵影を發見して、主戰艦隊・

索…索

裝甲巡洋艦隊・東鄕・瓜生の諸戰隊は隱岐の西北なる竹島の南方にて、此の敵を包圍せり。これなんネボカドフ少將が、擊殘されたる主力を率ゐて北方に奔る一隊にて、戰艦・海防艦・巡洋艦、合せて五隻なりしが、敗餘の殘艦已に抵抗の力なく、我が艦砲火を開くや、忽ちにして白旗を立てゝ降意を表しければ、特に將校以上の帶劍を許して其の降を受けたり。獨り巡洋艦イズムルードは其の快速力を利用して遂に北方に逃げ去りぬ。

かくて諸戰隊は八方に索敵運動をなして、或は殘艦

を撃沈し、或は生存者を救助收容せしが、磐手・八雲の一隊は敵艦アドミラル、ウシャーコフを發見追及して降伏を勸告せしかど、彼はこれに應ぜず、甘んじて撃沈せられたり。敵ながらもあつぱれなる振舞なり。きのふオスラビヤの沈沒せし時、艦長ヘブルが生存して收容せらるゝを屑しとせず艦橋に立ちて自殺せしと相竝びて一對の美談たり。

こゝに驅逐艦、漣・陽炎は、鬱陵島附近にて敵驅逐艦を發見し極力追撃して、午後五時砲火を開きしに、敵は白旗を掲げて降を乞ひ、艦内に將官の在ることを信號せり。事の樣不審なれば、我が士官は日本刀を帶し、兵は小銃を携へて臨檢せしに、豈圖らんや、敵の司令長官ロジェストウェンスキー中將及び幕僚等ここに匿び居たり。中將は重傷を負ひたれば、その懇請を容れて只數人の將校のみを我が艦に收容し、綱を以て降艦を引きて佐世保に入りぬ。きのふまでは大國の司令長官として海洋に横暴の限を盡しゝが、今日は捕虜となりて敵國の士官に引かれ行く、あはれといふも愚なり。

かくの如くして、敵艦三十八隻の中、八隻の戰艦は其

獲…穫

の六を撃沈し、其の二を捕獲し、其の他裝甲巡洋艦以下も亦或は撃沈し、或は捕獲し、或は抑留し、若しくは武装を解除したり。その辛うじて逃れ得たる者僅かに二隻のみ。捕虜は司令長官以下無慮六千と注す。而して我が失ひし所は水雷艇三隻・死傷六百餘人にして、其の他、艦艇に多少の損害を受けたれども、今後の役務に支障あることなし。

今回の如き大捷・鏖戰は有史以來の海戰に未だ曾て聞かざる所なり。有名なるトラファルガルの大捷すら艦船の損害少からず、ネルソン大將は壯烈なる

敕＝勅

戰死をなせるに非ずや。敵と我とを比較するに、其の兵力大差あるに非ず、卻つて敵はネルソンが勝を得たる陣形を取り、我は佛西艦隊が敗を取りし位置を占めたり。しかも、能く此くの如き大捷を得たるは、豈戰勝の原因が物質にあらずして精神にあるの好例にあらずや。

捷書、宸聰に達す。五月三十日、聯合艦隊に敕語を賜ふ。其の中に宣へることあり。

朕ハ汝等ノ忠烈ニ依リ祖宗ノ神靈ニ對フルヲ得ルヲ懌ブ

東郷大將奉答の語に亦曰へり。

此ノ海戰豫期以上ノ成果ヲ見ルニ至リタルハ、一ニ陛下御稜威ノ普及及ビ歴代神靈ノ加護ニ依ルモノニシテ、固ヨリ人爲ノ能クスベキ所ニアラズ。

平和克復の後、米國の富豪シッフ氏我が邦に來遊し、歸りて國人に語りて曰く、「日本人は已に歴史上未曾有の大捷を忘れたるが如く、今や專心、戰後の經營に從事せり。」と。ガーター勳章を捧げて渡來し給ひし英國コンノート親王の隨員リーズデール卿が歸りて夫人に示せる紀行にも亦この事を稱揚して、「日本人の此の謙遜自重なる精神は名譽ある大捷の原因にして、彼等はこれを以て世界の模範的國民たるものなり。」といへり。（女子國語讀本）

忘……忙

一六　せめては草

森　鷗外

鴨綠の川越えてより、滿洲の野の高黍や、
再び實のりて刈られけん、待てば久しき歲月よ。
いざや迎へん、皇軍を。
白楊疏に、陰もなき廣野の夏やいかなりし。
狡兎をまねぶ土窟の冬の夜やはた如何なりし。

綠……緑
疏＝疎＝踈

いざや迎へん、皇軍を。
愛兒討たせし將軍よ、うからはらから魂あへる
友喪ひしつはものよ、よくぞまさきく還りぬる。
いざや迎へん、皇軍を。
陸に奉天おとしいれ、海に艦みな沈めてし
捷にふさはぬ獲をば忘れて今日を祝ひなん。
いざや迎へん、皇軍を。
日頃御國のアルサスとをしみし領土樺太も、
此の戰のおもひでに、せめては半ば還されぬ。
いざや迎へん、皇軍を。

人のとつぎの衣織りし恨十年の遼東も、
此の戰の思出に、せめては我が手に落ちにけり。
いざや迎へん、皇軍を。
望の夜過ぎて月は虧け、敵器も滿つれば覆る。
滿ち足らはざる平和ぞなかく　裔の幸ならん。
いざや迎へん、皇軍を。
白き薔薇にけおされしくちなし色の笆の菊、
今は扶の杖しげくかゞやく地の中黄色。
いざや迎へん、皇軍を。（5た日記）

一七　梅雨

徳富蘆花

雨降りて止み、止みてまた降る。鶏聲と蛙聲とこもごも晴雨を爭ふ。

雨の絶間に出でて、麥藁まじりの深泥を蹈みつゝ、村を過ぐれば、綠暗き家には人ありて梅子を落し、畑には甘藷を植うる女あり。嫩黄田々、秧猶疏にして、水多く、田より田に落つる水は音さへ濁りてごぼ〳〵と鳴る。

川には膏の如き碧潮滿々として、黄なる麥藁一束浮き沈みつゝ漂へり。川邊の蘆稀に穗を出せり。そ

藁＝藁

の蘆を折り敷きて、鰻・鯊を釣る子供あり。

氣重うしてこまやかなり。村より出づる煙の濕りて立ちものぼらず、靄となりて這へるを見よ。山の藍深く、綠濃うして、滴水を落さば、その色の融けて流れんとするさまを見よ。

山に梟の聲あり。雨はら〳〵とまた降出でぬ。

（自然と人生）

一八　鳥居勝商

湯淺常山

天正三年、勝賴、奥平九八郎信昌が三州長篠の城を圍

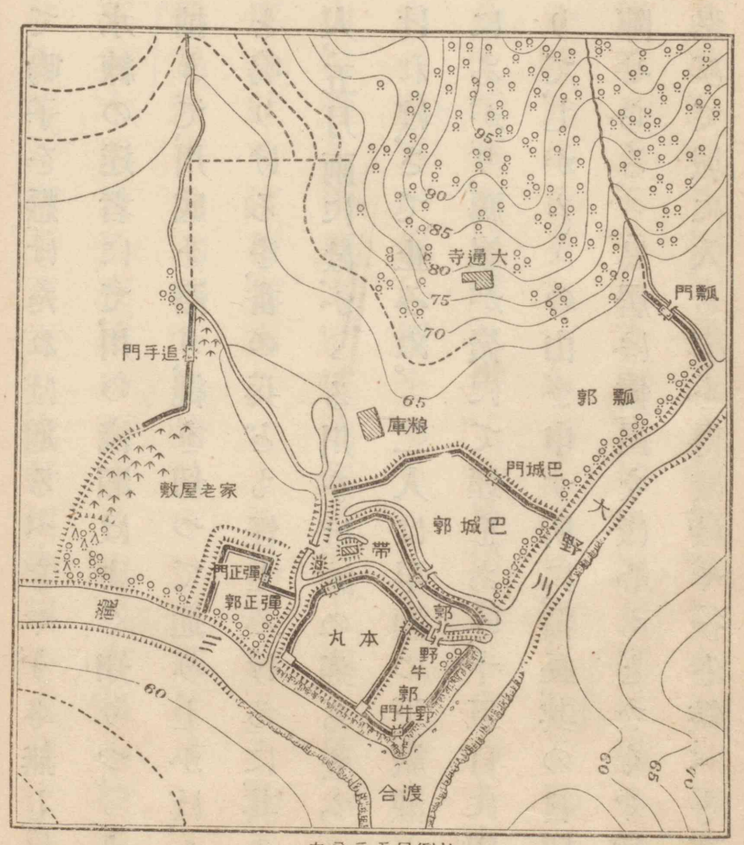
糧＝粮

縄＝縄

み攻む。東照宮援兵を織田家に乞はせ給ひ、後卷の謀をめぐらし給ふ處に、城中糧米既に盡きんとせしかば、此の旨を告げ奉らんため、鳥居強右衛門勝商に命じて、密かに城を出す。鳥居、「逃れ出づる事を得ば、向の鴈峯が嶺に煙をあぐべし。三日過ぎて、又かの山に煙を兩度あげば、後卷なしと知り給ふべし。三度あげなば、後卷あることを知り給へ。」と約しければ、信昌、鈴木金七郎を鳥居にそへて遣はす、五月十四日の夜、城の西なる山の岩根をつたひて川に入る。寄手素より大野川・瀧川の水底に縄を張り

*天正三年五月。

て、鳴子を懸けたれば、通るべきやうも無し。二人は水練の達者にて、川の淺瀨はよく知りつ。小脇差を抽きて、川底を潛り、縄を切つて通りしかば、からくと鳴りけるを、番の兵ども怪しみけるに、其の中に一人、「五月雨には、かゝる川をば、鱸の通るならん。」と言ひければ、さて止みぬ。二人は早瀧の下、廣瀨といふ處にあがり、鴈峯が嶺にて煙をあげ、十五日に岡崎に參りて、しかくの由を申す所に、信長、其の日岡崎に著陣せらる。鳥居は「信昌なほ心もとなくや候らん。忍びて城に入る事を得ば、はや後卷候べき事、審かに



長篠城地圖
（日本戰史に據る）

申さん」とて引返す。鈴木は「信昌が父、美作守貞能に告ぐべし」とて、鳥居に別れけり。

鳥居、鴈峯が嶺に上り、相圖の煙三度あげて後、篠原といふ處に行き、忍入らんとするに、柵嚴重にして沙をまき出入の人の足跡をあらためしかば、なかなか入るべきやうなくてためらひけるを、穴山の手の者見つけて、怪しみて遂に搦取りけり。勝頼遣遙軒信綱を以て仔細を問はるゝに、鳥居、事の由をありのまゝに答へしかば、勝頼鳥居を呼んで、「汝が命を助くべし。汝、城際に往きて、『信長は上方の軍にて、此の城の後卷

思ひも寄らず。』と言はゞ、城兵降參すべし。　さらば汝に厚く賞せん。」と言はれしかば、鳥居乃ち、「心得候。」とて、城門近く至り、「後卷とて、信長御父子、岡崎まで昨日旗を出され、先陣は一宮に陣せり。　德川殿御父子、野田まで御馬を出されたり。　此の城、運を開かんこと掌の中にあり。」と言ひければ、甲州の者ども大いに驚き、鳥居を引連れて、勝頼にかくと申せば、勝頼大いに怒つて、城に向け磔にして殺しけり。　長篠にて勝頼敗北して後、信長を始め、鳥居が無雙の忠なることを感じ、作手の甘泉寺に懇に葬られけり。（常山紀談）

サウ　ヲ　ゴ　ニ　ヒ　ニ　ノ　中　ショウ

タク　チク　はりつけはる

磔…傑

一九　細川幽齋

或時、太閤徒然の餘り、人々を御前に召して雜談して居られますと、さる大名から、牡蠣と海鼠腸とつべたとの三種を獻上して參りました。　何れも海の物であり、殊に寒中でありましたから、大層お喜になり、直

細川幽齋

に其の席上にお持出になつて、幽齋に向ひ、「何か歌はないか。」と仰せられました。言葉の下から幽齋は、

「かきくらしふるしらゆきのつべたさに、
　このわためしてあたゝめぞする。」

とよまれました。

又ある時、幽齋その子三齋と一緒に參殿せられましたのを、太閤御覽あつて、

細き川こそ二つ流るれ。

とあそばしますと、幽齋とり

あへず、

御所車、引きゆく跡に雨降りて。

とつけられましたれば、太閤も手を拍つて、「それでこそ幽齋翁よ。」と、殊更お喜になつたといふことであります。（偉人幽齋に據る）

二〇　門生に諭す

室　鳩巣

諸君の如きは、春秋に富み、材力に足る。若し懈らずして日に學に進まば、何ぞ古人に及ばざるべき。然れども歳月は恃むに足らず、材力は多とするに足ら

ず、たゞ孳々汲々として勉めて息まざるにありぬべし。もし悠々として日を渉り、一旦年老い齡傾きて後、日頃の懈を思ひ出でていかに悔ゆとも何の益あるべき。即ち今、余が身の上にて候。されば古詩にも、

少壯不努力、老大徒傷悲。

といひ、陶淵明*も、

盛年不重來、一日難再晨。及時當勉勵、歲月不待人。

といへば、古人も此の感懷を同じうすとぞ見ゆる。此等の詩句、時々吟詠して勇進の氣を振ひ起すべし。

*名は潛。晉人。

又世に傳ふる朱文公(一)の勸學の文に、

勿謂今日不學而有來日。勿謂今年不學而有來年。日月逝矣、歲不我延。嗚呼老矣、是誰之愆。

言簡にして意も明白なり。折節打誦じて自ら警むるによかるべし。

それよりも余が常に愛するは陶侃(二)が語なり。

大禹聖人、乃惜寸陰。至於衆人、當惜分陰。豈可佚遊荒廢、生無益於時、死無聞於後。是自棄也。

といへるこそ學者志を立つる法とすべきなれ。前にいへる淵明が詩も曩祖以來の家法にこそと思は

(一)朱熹。宋人。

(二)晉人。陶淵明の曾祖父。

る。凡そ人と生れて學に志ありといふきはの、生きて時に益なく死して後に聞ゆることなく、草木と同じく朽ちはてんはいと口惜しかるべきことなり。されば諸君もこの陶侃が語をもて自ら激勵して日夜勤勉せらるべし。

但し學は勇進を喜ぶといへども又急迫なるを嫌ふ。とかく一生こゝを離れぬことなれば急迫にして求むべきにあらず、たゞ懈を戒めて常に聖賢の書に優游涵泳しなば、久しうして自ら進益あるべし。余昔加賀にありしとき、士族の中に紹鷗(一)利休(二)が風流を慕

(一)織田信長が茶道の師なり。
(二)千宗易。豐太閤が茶道の師なり。

ひて茶湯を好む者あり。江戸に行役するとき道中茶具を持して、逆旅にても釜をかけ炭をおきて樂しみとしけるを、同行の人見て、いかにすけばとて道中にてはやめよかし。といへば、その人いふは、道中とて一生の外にあらばこそ、これも一生の日數の内なればわが茶湯をする日にあらずといふことなし。家にあると何ぞ異ならん。とてその後もやめざりき。學者の道に志すも此の人の茶湯を好むが如くなるべし。（駿臺雜話）

匠　匡　匣

二一　我が幼時

新井白石

わが六歳の夏の頃上松といひし人の、少し文字などありしが、七言絶句の詩一首教へて、其の意を解き聞かせしに、やがて誦をなしければ、三首まで教へられしを、人にも講じ聞かせたりき。「此の兒、文才あり。いかにも師を擇びて學ばしめらるべし。」など、彼の人もいひしかど、頑なる昔人たちの云ひしは、「昔より言傳へし事あり。『利根・氣根・黄金の三こんなくしては、學匠にはなりがたし。』といふなり。此の兒、利根こそ生れつきたらめ、なほ幼くして、その氣根のほどもはかりがたく、家富めりとも見えねば黄金のこと心得られず。」などいひき。我が父も「戸部の御いつくしみによりて、常に側を離れ參らせず。學に入れ、師に從はしめん事もかなふべからず。されど、をさなきより、物書くことをば、戸部も人々に語りぼこらせたまひしことなれば、せめてものをば

(○)新井與次右衛門正濟。上總國久留利城主土屋民部少輔利直。

新井白石

書習はしめたくこそ侍れ」とて、我が八歳の秋、戸部の上總國に往きたまひしあとにて手習ふことを教へしめらる。

其の冬の十二月なかば、戸部歸り參りたまひしかば常に傍に侍ふこと故の如く、明けの年の秋、また國に往きたまひしあとにて、課を立てられて、「日のうちには行草の字三千、夜に入りて一千字をかぎりて書出すべし」と命ぜられたり。　冬に至りぬれば、日短くなりて、課はまだ満たざるに日暮れんとすることたびたびにて、西向きなる竹縁のある上に机を持出でて、

堪……湛

書きをへぬることもありき。　また夜に入りて手習ふに、睡の催して堪へがたきに、我に附けられしものと密かに謀りて、水二桶づつかの竹縁に汲置かせて、いたく睡の催しぬれば、衣脱ぎ捨てゝ、まづ一桶の水をかぶりて衣打著て習ふに、はじめは冷かなるに目覺むるこゝちすれど、しばし程經ぬれば、身暖かになりて、また睡くなりぬれば、水をかぶること前のごとくす。　二たび水をかぶりぬるほどには、おほやうは課をも満てたりき。　これ我が九歳の秋・冬の間のことなり。

かゝりし程に、この頃よりは、我が父の人に贈り給ふ文をばかたの如くには書きたり。十一歳の秋、また課を立てられて、庭訓往來を習はしめられ、十一月に至りて、十日のうちに淨寫して參らすべしと命ぜられ、命ぜられし如くに事を終へしかば、册になして戸部に見せ參らす。賞め給ふこと大方ならず。十三の時よりは、戸部の、人と贈答し給ふ程の文ども、大方は我に命ぜられき。

又、十一歳の時に、我が父の友の關といひし人の子供は太刀打の技に勝れて、人に教ふることありしを、我にもこの技教へられん事を望みしに、「わぬし未だ幼し。これらの技學ばんこと尚早かり。」といふ。「さこそ侍るべけれど、太刀使ふ事少しも心得ざらんには、刀脇差、腰にせんこと誠に不用の事にや。」といひしかば、「のたまふ所誠に然なり。」とて、傳へて習はしめたり。かゝりし程に、其の年十六になりし者の、我と藝を試みんといひしかば、木刀をとりて、三たび合ひて三たびまで勝つことを得たりしにぞ、人々も亦興に入つて笑ひける。（折焚く柴の記）

二二　故郷

正岡子規

郷……卿
窮＝窮

世に故郷ほどこひしきものはあらじ。花にも月にも喜にも悲にもまづ思ひ出でらるゝは故郷なり。故郷は學問を究め、見聞を廣くする地にはあらず。されど故郷には歸りたし。故郷は事業を起し、富貴を得る地にはあらず。されど故郷には住みたし。兩親姉妹あるが爲に故郷に歸りたしと思ふもあらん。我は親はらからとも今は故郷にあらねど、猶故郷こそこひしけれ。都にありて世を厭ふが爲に故郷に住みたしと思ふもあらん。我はさまでに世を

抑……柳

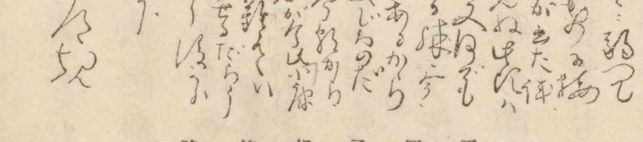
厭ふふしもなくて、猶故郷こそこひしけれ。想へば、十餘年の昔、はやり氣の抑へ難くて、單身故郷を出で行かんとこそは勇みしか。いざ首途といふ際に一點の熱涙は覺えず頰のあたりに流れ來るを、見送りの人に見せじと顏そむけたる時の苦しさ、何やらん胸につかへたる心地なりき。母親の乳房と故郷の土とは離れうきものなり。

故郷近くなれば、城の天主閣こそ先づ目をよろこばす種なれ。低き家、狹き町、淋しき松繩手、丈高き稻の穗、鼻の尖に竝びたる連山、をさなき頃より見馴れた

る一軒家、見るもの皆莞爾として我を迎ふるが如く、何れなつかしからぬはなし。まづ身よりの家をここかしことおとづれて久闊の情をのぶれば、年老いたる婆々様、痩せたる叔父御、肥えたる叔母御、よく居眠する下女の顔さへ見覺えたるまゝに少しも變らず。さて變らぬは故郷よと思ふも歸著きし瞬間なり。伏線

變らぬはめでたけれど、全く變らでは何の面白き事かあらん。變らずと見るうちに、いさゝかながらかれもこれも變り行きたるこそなかくに聞きて見

隙＝隙



正岡子規筆蹟

てゆかしけれ。人の上につきて第一に變りたるは、わが從弟妹のいたくも成長したることなり。「都の人こそ來たまへれ。われも其の顔見ん。」などひしめきあひ、わが前に跪きて禮を述ぶるもあれば、襖の隙よりはづかしげに窺ふもあり。をさなきは、はじめて見たる顔もあり。さ

らぬも、おもかげばかりはもとのまゝにて、振分け髪の、兒髷に變りたるも少からず。曾て見し時には、小學讀本を高らかに讀上げて誇りげに人に聞かせたる男の子の、今ははや海陸軍を談じ、外國の形勢を說く程になりたるもあり。唐黍の殼などもてこしらへたる雛を箱の上に竝べ、まゝ事に餘念なかりし女の子の嫁入すべきほどになりて、わが膝もとに茶を汲みて置きながら、顏もえあげで退きたるなど思へば、彼方よりは我をもしかく年とりたりと見るらんと、獨り心に恥づること多かり。

殼……穀

恥＝耻

戸の外に出づれば、何縣士族寄留といかめしく標札せる家どもの、大方は聞き知らぬ人の名を示して、中にも陸軍出仕の人々多く見受けらる。少き時より馴染になりし本屋は昔の樣ながら、見なれぬ丁稚は我を十年前の華客とも知らで、よそ〳〵しくもてなしたるも本意なく覺ゆ。豫て知りたる道具屋は引越しゝか、潰れしか、あらぬ店となりて、淋しかりし武家町の角に料理屋の檐を竝べたるもあいなしや。いで菩提所に詣でて、久しぶりに檐にても手向けんと辿りゆけば、山門なかば崩れて一條の汽車道は其

檐……擔

の傍を横ぎれり。あなやと驚きて少しく左に曲れば數百の墓累々として、未だあれはてぬとにはあらねど、彼の鐵道に隔てられ、父君などの墓のうしろには一歩ならぬに粟・黍など秀でたり。一目見るより覺えず目をしばたゝきぬ。

粟の穂のこゝを叩くな、この墓を。

嬉しきも故郷なり。悲しきも故郷なり。悲しきにつけても嬉しきは故郷なり。（子規隨筆）

粟……粟

二三　朝顔を贈る

拜啓酷暑の候中一の少閑を偷み今春頃載せし朝顔を嬉養せしに変生の手柔さとは可なりの出来と存ずる自賛なぐさ花物と謂めし分二鉢丈に過けし夏時の事一花多うれど此の花よ美くものあるべとも思もよらぬ可憐一の點よ於ては連聲花と及ぶべと雖も顔る姿形よ高み清楚の趣よ於ては比ヤシン

又に傳らんと雖も意新は之に伴はず
春雨なほ之を朔の葉とせるも偶然
なるべしと雖も但その生命の餘り
に短くして槿花一朝の榮を為せ
もの惜むべきに似たれども鴻業流芳
觀察して形容しがたき心も見れば
ぞ見るべき事なるべし
閑を所なるべしれば英國遂に此の
種類なる芳烈なる香氣を含むもの

（三）文書翰に據る）

有るべしと雖も元來熱帶國のもの故
可能なるべしと雖も貴兄及び一歩を進
めて香氣四溢の工夫をめぐらされば
ては如何に國益上益又面白きなる
なるべしと雖も　如何

二四　鷹山公と平洲

嘉納治五郎

細井平洲が米澤の鷹山公上杉治憲の賓師となつて居たことは前後僅かに二年に過ぎなかつた。が、當時の諸侯の尊大な風習にも拘らず、治憲は平洲を呼

(一) 尾張の儒者。一七二六―一八〇一。
(二) 米澤城主。一七五八―一八二二。
侯……候

ぶに必ず先生といひ、師弟の禮を正して、心から之を敬重した。その後、平洲は尾州侯の儒官として江戸に居るし、治憲は退隱して米澤に居られるので、互に相見ざること十餘年、治憲は朝暮其の師を仰慕する情に堪へなかつた。それを當主治廣が察して、尾州侯に平洲の賜暇を請はれると、尾州侯は之を快諾したので、平洲も大いに喜び、直ちに米澤に赴いて、滯留五十日、その間の禮遇は實

上杉鷹山公

に優渥を極めた。この手紙は其の後平洲が、門人に贈つたものゝ一節で、當時治憲の舊師に對した態度の美しさがよく顯れて居る。

府城より三里、大澤と申す驛に到り候處、老侯親しく郊迎ありとの沙汰相聞え候に付、急ぎ候うて八つ過に羽黑堂と申す地に到り申候。此處は南郊一里五六町も府城を距り申す處に候。最早侯の儀衞遙かに相見え候に付、五六町轎を下り步み申候處、普門院と申す寺の門前に、兩傍に雲從俯伏致し、侯は路の中心に立つて相待た

(一) 櫛島石梁。二四一三―二四八七。

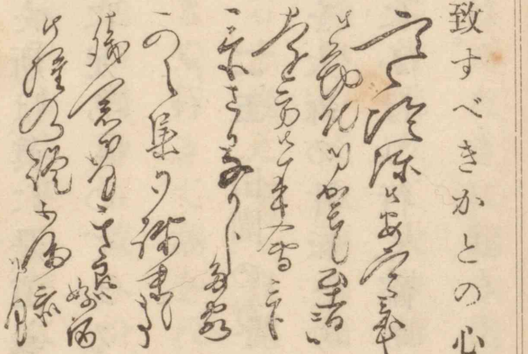
(二) 米澤城。

拜＝拝

れ候。進んで拜し申候處、愚情は地に手して拜したく存候へども、侯の態度、さ候はゞ地に手して御答拜これあるべき樣子故に、是非なく足跗に手して拜し申候。まづ何の言もなく老涙滿顏に御座候。老侯も一向無言にて、涙滿面「先生御安泰。」とばかりにて、御案内申すべしとて寺門に入られ候。外門より中門まで足指仰ぎ申候、三町ほどの阪に御座候。聯歩にして進み申候。なかく一歩も前行は之なく候。杖を進められ候へども、辭して杖つかず候間、若しや躓きも

辭＝辞

致すべきかとの心遣ひと相見え、手を引かん許りに比肩して進まれ候。



細井平洲筆蹟

堂に上り候節、御案内と申され候うて、階を上り、堂板に坐し、俯伏して待たれ候。それより座に上り候時、是は例御存知の通り、辭讓久しく候うて、漸く對座に相成、色々の言も出で候うて、御互に言語に及び申候。

此の手紙を讀んで行く中に、覺えず涙がこぼれるではないか。聖經賢傳といふも、本たゞ人情の醇粹敦厚な所から出たのである。師弟の溫情が此まで行つた所は、眞に是、道義の活現で、誠に萬代の龜鑑とするに足るものである。（青年修養訓）

龜＝亀

二五　田園の夏

杉村縱橫

家を大森の片ほとりに移してより此に一年。四季毎にかはり行く鄙の趣、中にも夏ばかりめでたきはなし。

涼＝凉

朝はまだきに起き出づ。風涼しく氣清ければ、自轉車に打乘りて大井・鈴ケ森の邊を走る。行人稀にして舞ひのぼる塵もなし。曉風身に沁みて夏の半ばなるを覺えず。日麗かなる時は露けき野草蹈みしだきて、行きて潮を八幡の濱に浴ぶ。朝は水澄めれば、底の眞砂も數へつべし。鏡の如き海づら、彼方・此方泳ぎまはりて汀に歸れば、水樓、人晏くして、雨戸繰る音始めて聞ゆ。

膳…繕

歸りて朝餐したゝむるに、必ずしも膳羞を須ひず。紫深き茄子の淺漬に、番茶の煮ばな香いと高し。食

卓を圍むもの、母と妻と二兒と、伊豆より來れる少婢と、これに某生とわれとを加へて合せて七人なり。某生は夏季休業中來りて我が家に宿れるなり。時餘りあれば、更に冷水に浴し、さては素跣足にて裏の瓜畑に水を注ぐ。さるべき暇なき時は白麻の衣輕く著なして直ちに東京に向ふ。八時十三分の汽車を待合す人々大森停車場のプラットフォームに賑はし。知る、知らぬ、互に目禮して昨夜は暑かりしなど語合ふ。流石に都離れたる樣をかし。

畫少し過ぎて家に歸る。さと水を浴びて後午餐の

裏＝裡
待……侍

膳に就く。清風徐ろに來るところ、庭の欅の影濃かなるところ、遙かに沖なる白帆のゆきかふを眺めて、いつとはなく夢に入る。覺めて後、日尙高ければ某生を促して海に入り、或は潮を浴び、或は貝を拾ふ。さては射的場の裏なる松林に入り、蟬聲雨の如きを聞きつゝ休らふ。

偶、都より友の訪ひ來るあれば、舟を儌うて灣内を漕ぎ、疲れて握飯を頰ばり、澀茶に喉をうるほす、その快如何ばかりぞや。歸りて拾へる貝の汁をとゝのへてもてなす。旨からずとせんや。朝のうちに來べ

徐……除
促……捉

き八百屋の來らぬ折は、裏の手作りの芋を煮て客に饗すべし。

家の裏にすべて十歩の累地あり。夏至る毎に、自然薯の蔓生して櫻の枝にわたり、楓の幹にかゝる。天僅かに曇りて暑さやゝ輕き時は、某生と共に赤裸々にして之を掘る。掘り掘りて手も届きかぬるに至れば、大地に横たはりて、半ば頭を穴に埋めて掘進む。二尺ばかりなるもの二つを得れば、以て一家の食膳をみたすべし。乃ち泥まみれのまゝ海に出でて洗ひ來る。歸れば薯汁既に成りて我を待てり。

裸……裏

水を家の内外に撒き、一浴して都の塵と垢と汗とを洗ひたる後、夕餐の膳に就く。朝餐に列なれる人の、一人も缺けず、一日の務を終へて集りたる、嬉しからずといはんや。

日暮れなんとするに、風益〻涼しく氣愈清し。東の障子明放ちたるところより見下せば、瑞々しき稲田のあなた、暮れ行く鈴ヶ森・八幡の濱の家々を隔てゝ、白帆漸く消え、漁火次第に鮮かなり。幼きものは少婢に伴はれて畔道にさまよひ出でぬ。母と妻とは八雲琴などおぼつかなげにかきならす。われは庭の

緣……椽

掠……椋

大樹にハンモック懸けわたして、のけざまに臥しつつ、緣に出でたる某生と語る。仰ぎ見れば星光愈明かに、樹梢をそよぎわたる風ことに涼し。垣を隔てて往きかふ村人の取りつくろはぬざれ言、手に取るごとく聞ゆ。

夜更けぬれば、人聲やうく疎なり。時には山王の杜のあたりを掠めて杜鵑の啼くを聞く。臥牀に入りやせまし、入らずやあらましなど打案じつゝ書を讀むに、燈火を慕うて飛來る蟲の數々、一に蛾、二に金龜子、三に蟬、四に蜻蛉、其の外は名をだに知らず。

夜殿々号望花月
鄰鄰何堪此今夜情

月の出でたる、またなく嬉し。麗しき光を水に映して、水際の松林を離れゆくさまのをかしきに、竊かに門を開きてあこがれ出づれば、同じ思の人のありてや、月下に横笛を吹きすさぶなど聞ゆ。我にもあらで、「月横大空千里明。」と吟ずれば、遙けき彼方に、年若き書生とおぼしきが、「風動金波遠有聲。」と歌ひつゞくる、さすがに興なきにあらず。（へちまの皮）

二六　良夜

徳富蘆花

良夜とは今宵ならん。今宵は陰曆七月十五夜なり。

月清く、風涼し。

夜業の筆を閣き、枝折戸開けて、十五六歩行けば、栗の大木眞黑に茂れる邊に出でぬ。其の陰に、潛める井戸あり。涼氣水の如く闇中に浮動す。蟲聲唧々。時々白銀の雫のポタリと墜つるは、誰が水を汲みて去りしにか。

更に行きて畑の中に佇む。月は今彼方の大竹藪を離れ、清光溶々として上天下地を浸し、身は水中に立つ思あり。星の光何ぞ薄き。鎭守の森も淡くして煙と見ゆめり。靜かに立ちてあれば我が側なる桑

囁……囁

の葉、玉蜀黍の葉は、月光を浴びて青光りに光り、櫻欄はさやく〳〵と月に囁く。蟲の音繁き草を蹈めば、月影、爪先に散りゆく。露のこぼるゝなり。藪のあたりには頻りに鳥の聲す。月の明きに彼等もえ眠らぬなるべし。

開けたる處は、月光水の如く流れ、樹下は、月光青き雨の如くに漏りぬ。歩を回して樹陰を過ぐるに、燈火の影、木の間を漏れて、人の夜涼に語るあり。

枝折戸閉ぢて、緣に踞する程に、十時も過ぎて、往來全く絶え、月は頭上に來りぬ。一庭の月影夢よりも美

なり。

緣に大なる楓の如き影あり、八角、金盤の落せるなり。月光其の滑かなる葉の面に落ちて、葉はさながら碧玉の扇と照れるが、其の上にまた黑き斑點ありてちらちら躍れり、李の樹の影の映れるなり。

月より流るゝ風、梢をわたる毎に、一庭の月光と樹影と相抱いて跳り、白ゆらぎ、黑さゝめきて、其の中を步する身は、是、無熱池の藻の間に遊ぶ魚にあらざるかを疑ふ。（自然と人生）

二七　友に答ふ

正岡子規

拜復御病氣免角御勝もなきれざる由驚入る所國郎と存ぜ御身の上承り安心申奉入る小生亦貧家に生れ弱に身體虛弱なる免常に有自由勝ゝ御等一ぞつゞも天運の廻り合せよくさまで難儀も致さず漸く今日まで こぎ付る申ぞ病弱につても一時も自ら神經をいらあるつゞも大患後は全く相あきらめる樣にあるも世界を大觀し心胸を濶くし不屈不撓の精神を以てどこまでも横着に世度

ることゝ所要とをなす者過の為に厭世的思想を起し輒ち軟弱の間に不幸を歎ずるは悟んとして求ぶ悟ることゝなる者過日に危く人事月に非なり我に於て何らあらん彼は彼なり我は我なり彼過ぎるを須ひずふ幸を歎ずる我要せず都て落ちとして一生を孤ふ是僅に悟る者なり不過を求ぶ不幸なふ幸とせず是非を一すし吉凶を等しくし自ら洗の俗界に立ちて己の素志を貫く者即ち是文悟徹底的の人物典に談ずべきものと

なす者なり者と感ずる而あり者一時のみに中一流なり

書餘和眉の節に讓るべしゝ以上

九月十日　露月生

御帰國多端なるべしゝ

金は出今次入用の又は出歸京後にて至きる

若し至急の為用なるべしその旨一寸御報

下されたしゝ

小生幼なして父に別れ母のみに人となる

幸に母の健康なるを為に獨り自ら喜ぶ
然れども去年彼の長逝なるもの
後幾日の母子あるべ
何ぞ母の慶ぶべき秋の風

（子規書簡集）

二八　模範村

廣島縣吳港の東約二里、廣村尋常高等小學校の前面にあたつて、極めて廣々とした、四圍の眺望のよいところ、そこに八間に十間半の大講堂と、附屬圖書館と、

勒……勤

を有して居る堂々たる公會堂がある。抑この公會堂は何の爲に建てられたのであらうか。日露戰役がめでたくすんで、世間には出征軍人の姓名と勳功とを勒した戰勝記念碑が到る處に建てられた。しかしながら廣村にはそんなものは出來なかつた。そして其のかはりにこの記念公會堂が建てられたのである。その理由とするところが頗る面白い。

「悲しいかな、日清戰役後全國を通じて五千餘名の勳功者がその勳章を褫奪されたといふ。幸にして廣

村には一人もそんなものはなかつた。しかし今後どんなはずみにかゝる事が出來せぬとも限らぬ。其の時には折角建てた記念碑も打倒さねばならぬことゝなる。それよりも寧ろ記念公會堂を建設して、長く出征軍人の勳功を傳へると共に、全村民の精神修養所として、益〻奉公の實を擧げることに努力するがよい。」とは廣村の村長の意見であつた。かくて此の公會堂は建てられた。

かゝる主義の村長を有する廣村は、さて如何にして治められてゐるだらうか。村には村長を會長とし

績……蹟

て示談會なるものが組織されてある。二十の小字に分れた廣村は、實に此の示談會が中心になつて自治の活動をやつてゐる。いはゞ此の示談會は此の村の機關であり、精神であるのだ。

その示談會の仕事には實に見るべきものが多い。廣村が模範村といはれるのも、一にこの示談會の活動振りによるのである。産業・教育・衛生・慈善はいはずものこと、勤儉貯蓄・社寺保存等一として立派な成績を擧げて居らぬものはない。

殊に教育基本金蓄積案・村有基本財産蓄積案の如き

實に巧妙を極めて居る。今前者に就いて其の方法を述べて見れば、まづ明治三十九年末現在金が貳拾圓五拾錢となつてゐる。之を初年の基本金額とし、之にその利子を年六分として壹圓貳拾參錢と、各學校の汚物賣拂代、生徒卒業修業の際の記念寄附金其の他臨時收入等より生ずる積立加入金とを加へ、年末に至つて合計壹百貳拾壹圓を得る。之を第二年の基本金とし、之にその利子と積立加入金とを加へること前年の如くし、二年目の終には貳百貳拾九圓を得る。年々同じ法を繰返し、十年にして壹千參百

繰……操

五拾四圓、五十年にして貳萬九千四百拾圓、八十年にして拾七萬六千九百九拾圓を得る計算がちやんと立てられて、現に著々實行されてゐるのである。同じ樣な方法は村有基本財產蓄積案にも實行されて、四十一年末には現に貳萬五千九百貳拾六圓を蓄積し得たといふ。

そして此等の事業は、總べて算盤の上から割出され、一々表に作成され、しかも實際に證據立てられて、度度開かれる示談會の席上、村長若しくは助役によつて說明され奬勵されるのである。

一體村治の大方針としては、事務の整理を確實にすること、村民の疑念を解くこと、萬事を周知せしめること、此の三つの箇條が定められてあるのだが、それらは何れも此の示談會の席上に於ていき〳〵として實際に現れ出で、少しも條文が死んでゐないのである。

山巔に殘つてゐる城址、河邊に榮えてゐる老松、それでさへ昔を忍ぶ種となつて、歴史的に鄕人を感化する力は大きい。況やそれよりも活々とした生業發達の歴史、基本金蓄積の歴史、勤儉貯蓄の歴史、其の他

址……趾

の事業の歴史が一々統計表によつて示される。村民が一致協同、益〻自治の實績を擧げようと奮勵努力するのは、尤もの次第ではあるまいか。打倒さないまでも、風殘雨虐幾百年の後、記念碑は或は崩れるかも知れぬ。しかしながら村長がなした此等の功績は千載尙朽ちぬであらう。

「村長選擧に競爭が起るやうなことでは、到底町村の爲に百年の大計を立てることは出來ません。」とは村長が常の言。村長名は藤田讓夫。態度寛宏にして、敦朴寡言。しかも二十數年來此の村の腦髓として

選……撰

*大正四年一月十日特に勳六等に叙せらる。

仰がれてゐるのである。（自治民育要義に據る）

二九　天理と人道

福住正兄

二宮尊德翁曰く、「世界は旋轉して止まず。寒往けば暑來り、暑往けば寒來り、夜明くれば晝となり、晝過ぐれば夜となる。又萬物生ずれば滅し、滅すれば生ず。譬へば、錢を遣れば品が來り、品を遣れば錢が來るに同じ。寢ても覺めても居ても歩いても、昨日は今日になり、今日は明日になる。田畑も海山も皆その通り、こゝにて薪を焚きへらすほどは山林にて成木し、

減＝減

掘……堀

こゝにて食ひへらすだけの穫物は田畑にて生育す。野菜にても魚類にても世の中にて減るほどは田畑・河海・山林にて生育し、生れたる兒は時々刻々に年がより、築きたる隄は時々刻々に崩れ、掘りたる堀は日日夜々に埋まり、葺きたる屋根は日々夜々に腐る。是、卽ち天理の常なり。

然るに人道は是と異なり。風雨定めなく、寒暑往來する此の世界に、羽毛なく、鱗介なく、裸體にて生まれ出で、家がなければ雨露が凌がれず、衣服がなければ寒暑が凌がれず。こゝに於て人道といふものを立

て、稻を善とし、莠を悪とし、家を造るを善とし、破るを悪として、人の爲に立てたる道なり。よつて人道と云ふ。

天理より見る時は善悪はなし。其の證には、天地に任する時は皆荒地となりて開闢の昔に歸るなり。如何となれば、是、卽ち天理自然の道なればなり。夫、天に善悪なし。故に稻と莠とをわかたず、種ある者は皆生育せしめ、生氣ある者は皆發生せしむ。人道はその天理に順ふと雖も、其の内に各區別をなし、稗・莠を悪とし、米・麥を善とするが如き、皆人身に便なるを善とし、不便なるを悪とするなり。こゝに至つては天理と異なり。如何となれば、人道は人の立つる所なればなり。

人道は、譬へば、料理の如く、三倍酢の如く、歷代の聖主・賢臣料理し、鹽梅して拵へたるものなり。されば、ともすれば破れんとす。故に政を立て、刑法を定め、禮法を制し、やかましくうるさく世話をやきて、漸く人道は立つなり。然るに天理自然の道と思ふは大いなる誤なり。能く思ふべし。」（三宮翁夜話）

鹽＝塩

三〇　山内一豐の妻

新井白石

昔、一豐、織田家に出で仕へしはじめ、「東國第一の名馬なり。」とて、安土に牽來て商ふ者あり。織田殿の家人等これを見るに、誠に無雙の名馬なり。されども價餘りに貴くして買ふべき人一人も無く、空しく牽きて還らんとす。

その頃一豐は猪右衞門尉と申しゝが、此の馬ほしと思へども、求むること如何にも協ふべからず。家に歸りて、「世の中に身貧しきほど口をしきことはなし。一豐、仕の初なり。かゝる馬に乘りて見參に入りたらんには、屋形の御感にも預るべきものを。」と獨言いひしに、妻はつくゞと聞いて、「その馬の價いかばかりにか。」と問ふ。「黃金十兩とこそ言ひつれ。」と答ふ。妻、「さほどに思ひ給はんにはその馬もとめ給へ。價をば自らまゐらすべし。」とて、鏡の筥の底より黃金十兩とり出しまゐらす。

一豐大いに驚き、「この年頃、身貧しく苦しき事のみ多きうちには、この黃金ありとも知らせ給はず。いかに心強くは包み給ひけん。されども今此の馬得べしとは思ひも寄らざりき。」と且は悅び、且は怨む。妻、

(一) 尾張の人。後に土佐藩主。三〇六―三六五。
(二) 信長。
貧……貪

「のたまふ所ことわりにこそ侍れ。　さりながら、これはわらはが此の家に參りし時に、父この鏡の下に入れ給ひて、『あなかしこ。　これ世の常の事に用ふべからず。　汝が夫の一大事あらん時に參らせよ。』とて賜ひき。　されば、家貧しく苦しむなどいふ事は世の常の習なり。　これはいかにも堪忍びても過ぎなまし。眞か、此のたび都にて御馬揃あるべしなど聞ゆ。もしさもあらんにはこの事天下の見物なり。　君また仕の初なり。　かゝる時ならでは屋形にも傍輩にも見知られ給ふべき由もなし。　善き馬めして見參に入れ給へと思へばこそ參らすれ。」と言ふ。　一豐やがて其の馬もとむ。

ほどなく都にて馬揃のありしとき、織田殿この馬御覽あつて、大いに驚きたまひ、「あつぱれ名馬や。　何者の馬ぞ。」と仰ありしに、「これは東國第一の馬なりとて、商人が牽きてまゐりしに、あまりに價貴くして、誰も買ふことかなはず、空しく牽きて歸るべかりしを、山内が買得て候。」と申す。　信長聞召し、「價貴き馬なり。當時天下に信長が家ならで買ふべき人無しとて、奥よりはるゞ來りしを、空しく還したらんには無念

の至なるべし。その山内はとしごろ久しき浪人と聞く。家もさぞ貧しからんに買得たることの神妙さよ。かつは信長の家の恥をもすゝぎ、かつは武士のたしなみいと深し」と感じたまふこと大方ならず。これより次第に身を起しぬといふ。まことにや。

（藩翰譜）

三一　四季の月

石川依平

うめ咲くそのに　かすみつゝ、
みねのさくらの　はなぐもり、
くもりもはてぬ　おぼろ夜の
つきこそはるの　ひかりなれ。

まだしきほどの　ほとゝぎす、
はつね待つ夜の　まくらより、
馴れてすゞしき　つきかげに、
ねやの戸さゝで　あかすなり。

きりの葉わけに　かげ見えて、
あきとほのめく　ゆふべより、

立ち待ち、居待ち、　待ちとりて、
いく夜かつきを　ながめけん。

木の葉ふりしく　やまのはの、
しぐれにくもり、　しもにさえ、
ゆきに照りそふ　つきかげを、
などすさまじと　おもふべき。（今葉歌集）

三二　不識庵

尾崎行雄

記者足下。僕、古今の賢哲・英豪に於て別に偏好する

*雑誌「精神」の記者。

所なし。智あるものは勇なく、勇あるものは智なし。材略に長ずるものは德操を闕き、大節毅然たるものは雄略に乏し。要するに、皆一箇の不具人たるを免れず。故に僕好んで古今東西人の傳記を讀むと雖も、唯其の長所に就いて之を師友とするに過ぎず。一讀爽然、景慕止む能はざる者に至つては、僕未だ其の人あるを知らず。然れども強ひて愛好の深淺を較すれば、彼、此より深きものなきにあらず。不識庵謙信の如きは、僕が景慕心の傾注することやゝ深き者なり。

彼、不幸にして北陬に生れ、上國の形勢に暗し。故に其の計圖未だ偏小なるを免れずと雖も、なほ天下を席卷し、宇内に號令する志なきにあらず。特に其の豪快義俠の氣質に至つては、高く戰國の諸將に傑出す。之を古今東西に求むるに匹儔あることなし。彼既に義にし

上杉謙信（高野山無量光院藏）

儔……籌

て亦智、既に勇にして亦仁、加ふるに勤王の至情を以てす。天若し之に年を假さば、其の成就する所、あに「越山併得能州景」を賦するに止らんや。

彼、素より身命を賭して信玄と爭ふの愚なることを知る。然れども、雄圖大略あるがために其の義俠心を矯抑せず、敢進勇往、人生復他望なき者の如く然り。眞に是、援弱抑强の天使にして、亦義俠心の凝結體なり。其の劍を横たへて能州の月に吟ずるに至りては、豪爽闊達、人をして覺えず唾壺を擊破せしむ。彼をして上國に生れしめば、信長素より雄圖を逞しう

俠……狹

天時不如地利、地利不如人和。

する能はず、豐太閤亦陪臣を以て終らんのみ。惜しいかな、彼、人和を得て天時を得ず、天時を得て地利を得ず、壯圖未だ上國に伸びずして、將星既に北陬に落つ」。是、僕が嘆惜して措く能はざる所なり。聊か鄙見を記して足下の推問に答ふ。（古人評論）

衰……衰

三三　朝鮮の民情

萩野由之

余嘗て韓國を巡遊し、つらく其の國の制度風俗を見て、韓國の衰亡は人民の無能なるにもあらず、土地の瘠确なるにもあらず、氣候の不調和なるにもあらず、全く上流社會の腐敗に因るを認識し、「韓國を滅すものは、其の國民にあらずして、彼の兩班なり。」と言ひき。

撤……徹

彼の國には王室の下に多數の兩班と云へる貴族あり。次に中人、次に常漢即ち平民あり。其の下に賤民即ち奴隷あり。されど今はこの階級を撤去したりと聞く。兩班は其の中にまた幾多の差等あり。彼の王室の如きも實は兩班中の人たりしなり。然れば兩班は華族の如くなれども、又其の卑しき者は士族に類す。其の數は十萬とも十數萬とも稱すれ

ども確かならず。兩班の次の階級なる中人は宛も日本の士族の地位に立つ者にして、十萬乃至二十萬人ありと稱すれども是亦確かならず。而して此等兩班・中人は卽ち官吏ともなるべき資格を有する階級なり。

常漢卽ち一般國民は、極めて溫順勤勉なる人民と稱すべく、其の體力もまた頗る强健にて、農民としても、勞動者としても、世界中稀に見る體格を有せり。而して韓國の實業は、從來農工商の順序をなし、農は比較的に貴ばれ、工は賤民同樣に取扱はれ居たりしが

ため、工業は非常に衰へ、今日の朝鮮にては新羅・高麗時代の工業は夢にも見ることを得ざる有樣なり。

之を要するに彼の國の近世史を滿たせる黨同伐異の紛爭は、全く彼の兩班・中人の官吏社會に起れるものとす。卽ち李朝を建てたるも彼等の社會なれば、李朝を滅したるも彼等の社會にして、一般の順良なる國民は、之に與らざるなり。

上奢りて下窮す。濯々たる禿山、蕭條たる村落、見るからに亡國の氣象を具へたる韓國は實にあはれなる國なりき。李朝五百餘年といはず、高麗朝の時代

より、兩班等は政權爭奪のために陰謀譎詐を事として相鬩ぎ、其の比較的平穩なる時に當りては、己、獨り榮華に耽りて民の痛苦は心にもかけず、資用足らずといへば民間に誅求して百方收斂す。而して兩班の上には王室あり、上より上よりと壓迫して、濕薪を束ぬるやうにすれば、村落も田畑も山野も皆荒蕪せざるを得ざるは當然の事のみ。然れば足一度韓國に入れば、其の官衙と民屋と、兩班と下民との對照は、人をして其の懸隔の甚だしきに驚かしむ。官衙は堂々たる瓦屋の大廈なるに、下民は矮小なる茅屋、豚

衙……衙

小屋の如きに羣蠅と共に蠢々乎として生活す。中には勤勉して些の貯蓄をなし、子孫の計をも爲さんとする者あるべけれど、財を生ずれば則ち官は高きに居て之を凝視し、言を設けて誅求し、應ぜざれば獄に投じ、笞杖を加ふ。又技術に長ずるものあれば、彼等は種々の細工を命じて其の價を償はず、應ぜざれば生命を失ふべし。此を以て技に巧なる者は藏して顯はさず。爲に工藝技術は年々に退歩して、昔名高かりし陶器も漆器も今は一種も見るに足るものなし。此の如くにして國の亡びざらんことを求む

孔子の言

*小子識レ之、苛政猛シ於虎ヨリ也。

とも得べからず。彼の國民は眞に愍むべき人民なりしなり。

「*苛政虎よりも猛し。」と。上奢り政荒むがため、收斂誅求至らざるなき情態は次の例に徵して最も明なり。十餘年間平安南道の觀察使たりし閔某といへるは大の誅求家なりき。觀察使といへば該道の最高長官にして、行政・司法は固より、兵馬の權をも有せるが、其の上に彼は平壤離宮の營造監をも兼ねたるにより、威權薫灼當るべからず。收賄誅求手を盡したる上に、地方の兩班の資格を賣りて非常なる富を致し、

人民の痛苦は言語に絶したり。誅求に誅求を重ねて最早絞るべき民膏なしと見て取りたる閔は、遂に轉任して平安道を去りぬ。去るにのぞみて、同道の人民は何思ひけん熱心に留任運動を起したり。是豈大不可思議の事にあらずや。人民は曰く、「吾等は最早貧窮骨に徹せり。長官いかに取らんとすとも取るべきものはあらじ。長官も既に之を知ればこそ任を轉ぜんとするなれ。若し新に觀察使の來るあらば、更に又新しく吾等に向ひて誅求を加へん。然らば骨を削るに至らざれば已まざるべし。寧ろ

閔觀察使の在任を希望する所以なり。」と。其の言流石に意表に出で、日本人などの思ひも及ばざる所なり。嗚呼韓國の人民は此の如くにして苦しめられ、官吏は此の如くにして榮耀を極めたり。「一度觀察使となれば、三代坐食を得。」といへる韓諺あるにても、其の一斑は推すに難からず。觀察使の上には大臣あり、國王あり。又其の下には郡守あり。幾層も下に向ひて壓力を加ふ。下民何ぞ堪へん。國の衰亡する、故なきにあらざるなり。

然れども朝鮮人は極めて勤勉順良なり。余が彼の

坐……座
堪……絶

地に遊ばんとする前、經驗ある人は余に告げて曰く、「韓人は譎詐多し。釜山に上陸せば、苦力を始めとして、命を用ひざる者は口舌を費すを要せず、唯鞭撻あるのみ。」と。余は「彼も亦人の子なるに。」と思ひつゝ、行きて應接もして見、使役もして見るに、柔順忠實、遂に一言の叱咤をだに要せざりき。況や鞭撻をや。地方に旅行して、田畑耕作の樣をも村落の生活をも見たるに、北韓に近き平原も到る處皆開けて、耙鍬の入らざる所なく、「人家も見えざるに、何處より來りて耕すらん。」と問へば、「皆二里三里の遠方より來る。」といへ

況＝況

り。江東郡には近年農業試作場を設けて農事改良の模範と爲す。一韓人私語して、「あれほどの狹き耕地に、人多くかけ金多くかけて作らば、吾等とても善く作らんこと難からず。吾等は人手なく、少人數にて廣き田畑を耕す上に、肥料を施すこと能はざる故かくは收穫の少きのみ。」といへりとぞ。亦一理なきにあらず。

日本人は朝鮮人が鐵道沿線に長煙管を携へつゝ、汽車を珍しげに見送る悠長なる態度を見て、皆惰民なりと思へるやうなれども、かゝる事は日本人にも尙

惰……墮

あるなり。朝鮮人は必ずしも惰民ならじ。浸水地の苗種の如く、汚水のために壓迫せられて生氣を失ひたれども、一旦天霽れ暑さ强くならば必ず生氣を回復して新萌芽を發せん。多年官吏の暴政に壓迫せられ、斯くの如きに至れる彼の國人も、一たび太陽の恩光に照らされなば一段の生氣を發すべきは亦必然の勢なり。

されば時局の發展して韓國の併合となりたるは同國に於ける一大革命にして、又一大生命なり。同國政府の廢亡よりいはゞ、韓人として痛歎もすべきな

弔＝吊

れども、それは前にいへる兩班以下の參政資格ある種族の慶弔にして、同國の基礎たるべき人民に於ては、寧ろ之に賴りて數百千年の蒙を啓くを得、枉屈を伸ぶるを得て、此に新生面を開くべき時節に到來せるなり。「虎より猛し」といふ苛政の虎口を遁れ來て、今や仁慈なる母の懷に入りしなり。然らば兩班者流のためには或は悲しむべし、國民のためには大いに慶すべき事なり。朝鮮國民の蘇生はこれよりなりと知るべし。（歴史地理）

三四　禁庭の野分（昭憲皇太后御作）

朝露のひるまはさしもなかりし空の、俄にかき曇り、夕づつの光も見えず。とかくするほどに雨いたく降出でて、ほとり近く語りあふ人の聲だに聞きわかぬまでになりぬ。閨に入る頃は尚雨の音のみ聞えしを、夜深くなるまゝに、雷さへ鳴りはたゝきて、夢現とも思ひ定めぬに、ひまなく稲妻のきらめき渡る、いとけうとし。曉がたには雨はをやみぬれど、風烈しう吹出でて、宮の内もゆるぐばかりなるに、いとゞ目も合はず。

(一)明治十一年八月明治天皇東山北陸巡幸十一月還幸。
(二)英照皇太后。

萩……荻

上には民の爲とて、畏くも遠き境に出でましたるほどなれば、いかなる行宮にましくて、此の風の音に御心を惱ましし給ふらん。皇太后の宮にはいかにおはしますにか。幼き宮たちも驚きやし給ふらんと思ひ續くるほどに、夜も明けぬれど、未だ風靜まらで、いづこもおろし籠めたる、いと物むづかし。軒近き栗の枝の結べる實ながら吹折らるゝ音いと烈しく、御階の下の芭蕉も、筒井の傍なる柳も、皆折れふしぬ。今をさかりなりし眞萩も名殘なく散亂れたる、いとさびしく見ゆ。宮の内だにかく荒れぬるを、まして

あやしげなる賤が家居などは倒れぬるも多からんなど思ひやれば、すゞろに悲し。

おしなべて實のりよしと聞きつる千町田の稻も吹きそこなはれつらんやなど、心にかゝりて、

國の爲科戸の神も心して、
稻葉の上はよきて吹かなん。

なほとやかくやと胸をいたむるほどに、いつとなく靜まりて、日影まばゆく雲間にさし出でぬるに、おのづから人の心もおちゐるにけり。

三五　明治天皇の崩御

明治四十五年七月十九日、明治天皇不豫にわたらせ給ふ。越えて三十日午前零時四十三分遂に登遐せさせ給ふ。億兆慟哭し、天下諒闇となる。

慟…働

即夜午前一時踐祚の式を行はせ給ふ。まづ賢所に祭典あり、皇靈殿・神殿に踐祚奉告の儀あり。尋いで天皇陛下には宮城正殿に出御あらせ給ひ、内大臣德大寺實則が捧げ奉る劍璽と國璽・御璽とを承けさせ給ふ。

此の日改元して大正元年とす。詔に曰く、

朕菲德ヲ以テ大統ヲ承ケ祖宗ノ靈ニ誥ケテ萬機ノ政ヲ行フ茲ニ先帝ノ定制ニ遵ヒ明治四十五年七月三十日以後ヲ改メテ大正元年ト爲ス主者施行セヨ

此の日翌日より五日間の廢朝を仰せ出さる。

三十一日午前十時各皇族を始として文武百官を召させられて踐祚後朝見の儀を擧げさせられ、左の勅語を下し賜ふ。

朕俄ニ大喪ニ遭ヒ哀痛極リ罔シ但タ皇位一日モ

曠クスヘカラス國政須臾モ廢スヘカラサルヲ以テ朕ハ茲ニ踐祚ノ式ヲ行ヘリ

顧フニ先帝睿明ノ資ヲ以テ維新ノ運ニ膺リ萬機ノ政ヲ親ラシ內治ヲ振刷シ外交ヲ伸張シ大憲ヲ制シテ祖訓ヲ昭ニシ典禮ヲ頒テ蒼生ヲ撫ス文教茲ニ敷キ武備爰ニ整ヒ庶績咸熙リ國威維揚ル其ノ盛德鴻業萬民具ニ仰キ列邦共ニ視ル寔ニ前古未タ曾テ有ラサル所ナリ

朕今萬世一系ノ帝位ヲ踐ミ統治ノ大權ヲ繼承ス祖宗ノ宏謨ニ遵ヒ憲法ノ條章ニ由リ之レカ行使ヲ愆ルコト無ク以テ先帝ノ遺業ヲ失墜セサラムコトヲ期ス有司須ラク先帝ニ盡シタル所ヲ以テ朕ニ事ヘ臣民亦和衷協同シテ忠誠ヲ致スヘシ爾等克ク朕カ意ヲ體シ朕カ事ヲ奬順セヨ

內閣總理大臣西園寺公望恭しく左の奉答文を捧讀す。

臣公望誠惶誠恐伏シテ言ウス

大行天皇奄ニ登遐アラセラレ臣民憂懼措ク所ヲ知ラス今叡聖文武ナル天皇陛下大統ヲ承ケサセラレ茲ニ彝訓ヲ垂レ給フ聖猷遠ク慮リ睿圖

遺スナク上ハ　先帝ノ鴻業ヲ纘キテ憲法ノ條章ニ循ヒ下ハ億兆ノ和協ヲ奬メテ忠誠ノ至情ヲ輸サシメ以テ　祖宗ノ休光ヲ無窮ニ發揚セントシ給フ是レ寔ニ宇内ノ齊シク仰ク所ニシテ臣庶ノ永ク賴ル所ナリ臣等　聖敕ヲ拜シ感激ノ至ニ勝ヘス今ヨリ後益〻匪躬ノ節ヲ效シ夙夜淬礪邦家ノ進運ヲ扶翊シ以テ　聖旨ニ答ヘ奉ランコトヲ誓フ臣公望誠惶誠恐頓首謹ミテ奏ス

八月二十七日天皇殯宮に於て、明治天皇の御追號を奉り給ふ。

九月十三日午後七時靈柩を青山なる葬場殿に奉遷し、十一時斂葬の儀を行はせらる。祭祀總べて古儀に則り、莊嚴沈肅を極む。即夜午前一時靈柩を汽車に奉移し、十五日伏見桃山陵の寶壙に斂め奉りぬ。

師範學校 國文教科書 本科用 卷一 終

文部省檢定濟
大正五年一月十二日 師範學校國語科教科書

明治三十六年十二月五日印刷
明治三十六年十二月八日發行
明治三十七年二月廿六日訂正再版印刷
明治三十七年二月廿九日訂正再版發行
明治四十二年二月廿八日訂正十版印刷
明治四十二年三月三日訂正十版發行
大正五年一月七日修正十六版印刷
大正四年十月三十日修正十五版印刷
明治四十四年十一月十三日訂正十三版印刷
明治四十四年十二月十六日訂正十三版發行
明治四十五年二月六日訂正十四版印刷
明治四十五年二月九日訂正十四版發行
大正四年十月廿七日修正十五版印刷
大正五年一月十日修正十六版發行

定價
卷一、二各金三拾八錢
卷五金三拾五錢
卷三、四、六各金二拾八錢

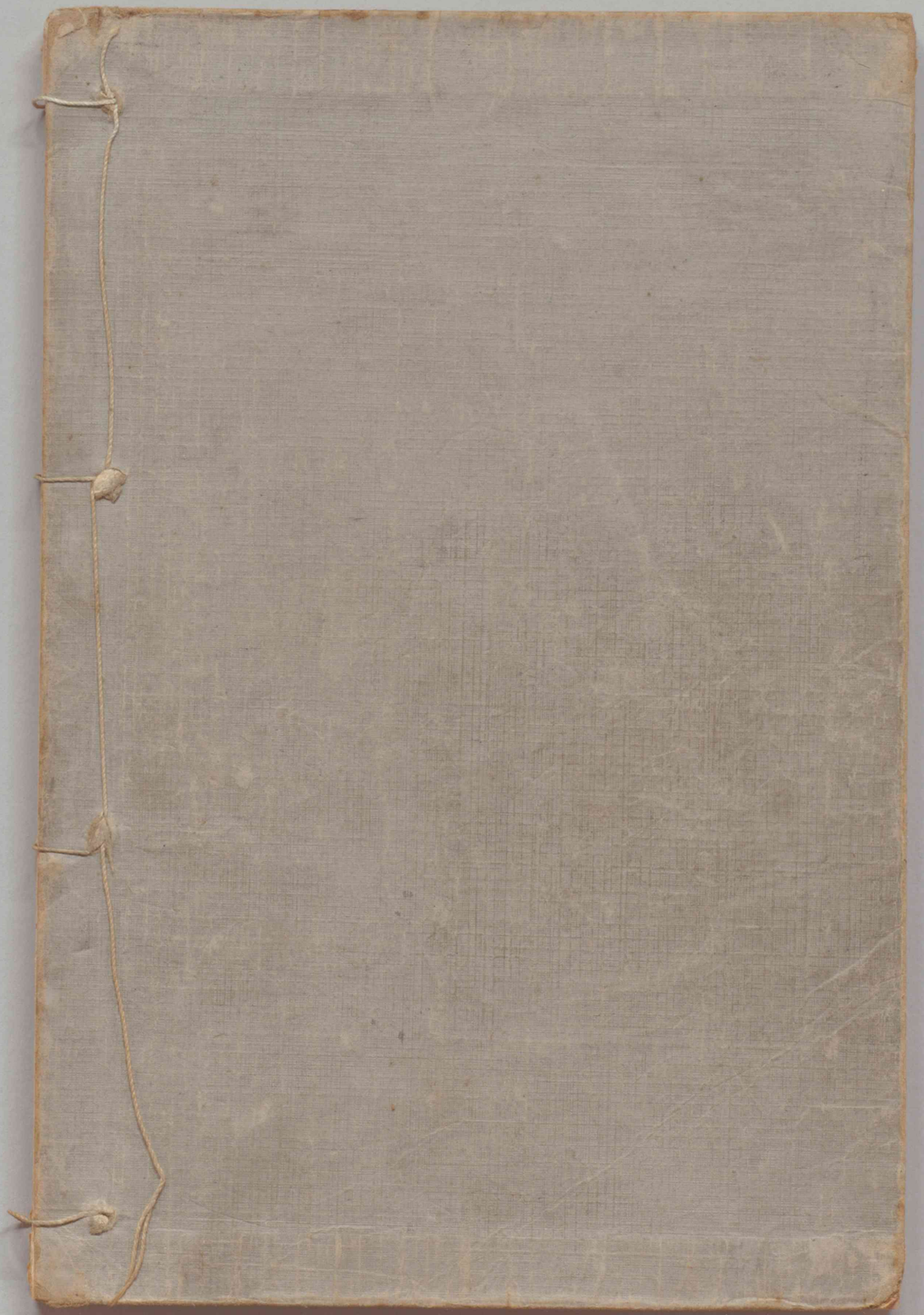
東京市小石川區高田老松町五十二番地
編者 吉田彌平

東京市神田區裏神保町六番地
發行者 上原才一郎

東京市神田區裏神保町六番地
發行所 光風館書店
（電話本局二千三十九番）
（振替口座東京三二七番）

東京市神田區裏神保町六番地
印刷者 四海民藏

著作權所有

本館發行の教科書は常に多數の製本準備有之候につき萬一各地賣捌所に賣切等にて課業に御差支の節は直接御注文被下候はゞ直に御送附可致候

東京市神田區一ツ橋印刷所